



## 墨東大学の挑戦Ⅱ

**bockt**

加藤文俊

岡部大介

木村健世

# **CHALLENGE OF THE BOKUTO UNIVERSITY II**





## CONTENTS

### 04 はじめに

- 08 墨東大学とは何か
- 16 墨東大学講義録
- 54 研究発表
- 64 まちのおみやげプロジェクト
- 78 墨東大学をふりかえって

## はじめに

昨年、「墨東大学」第1期生の卒業をお祝いした2日後に、あの大地震に遭遇しました。残念ながら「卒業制作展」は、その日だけで閉じることになり、京島校舎のシャッターは、しばらく閉めたままに。無力感に向き合いながらも、一週間ほどが過ぎるとなぜか力が湧いてきて、みんなで『墨東大学の挑戦』という報告書を完成させました。\*

それなりに、達成感があったのですが、どうもスッキリしない。そんなわけで、まずは秋まで、そして、けっきょくのところは、春まで続けようということになりました。その2年目の活動をまとめたのが『墨東大学の挑戦Ⅱ』です。まずは、無事に完成したことを喜びたいと思います。

昨年度は、「学生とアーティストによるアート交流プログラム」\*\*として支援をいただきながら「墨東大学」の企画・運営をすすめることができたのですが、2011年度については、ぼくたちだけです。なかなか厳しい…と思いつつも、前年度の活動をつうじて、3人とも、すでに墨東エリアに魅せられていたので（実際に上手くとけ込めていたかどうかはともかく）、あまり細かいことは考えずに新年度をスタートさせました。

2年目の「墨東大学」プロジェクトは、ややベースダウン。いろいろな理由で不完全燃焼の気分をかかえながら、年度末を迎えてしままったように思えます。そして、みんなでこの1年をふり返ったとき（くわしくは、巻末の「鼎談」を参照）、このモヤモヤ

感こそが、墨東エリアの魅力なのではないかという話になりました。強引に結論づけようとしているわけではありません。甘えたり許したりという関係は、そう簡単にできあがるものではないのです。適度な緊張感を持ちながら、まちに暮らす人びとと接することこそがじつは重要で、それによって関係が強くなり、長い関わりへと育てられていくのだということを実感しました。暖かくて冷たい。その意味で、ぼくたちは、本当に多くのことをまちに教えてもらったと思います。

4月いっぱい、ひとまず「墨東大学」プロジェクトを閉じることになりました。誰も口にしません、本当は、みんな、あともう1年くらい続けてみたいと思っているはず。はじめにのさいごに。無事にこのプロジェクトを終えることができたのは、何よりも「墨東大学」という場に集った皆さんのおかげです。ありがとうございました。

2012年3月 末日

bockt を代表して 加藤文俊



\* bockt (編著) (2011)『墨東大学の挑戦：メタファーとしての大学』（墨東大学出版会）PDF版は、以下のサイトより全文ダウンロードすることができます。<http://bup.bokudai.net/>

\*\*「学生とアーティストによるアート交流プログラム」とは、学生が地域や社会の中でアーティストと交流・協働しながら、実験的・先進的なアートプロジェクトを実施する機会を提供することを目的として、東京都と東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化団）が、大学等と連携して実施する事業です。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す「東京アートポイント計画」の一環として実施されています。

#### 墨東大学プロジェクト（フェーズ2）

この冊子は、平成23年度慶應義塾学事振興資金による研究補助（特B：「地域資産」の可視化を支援するコミュニケーション・デザインに関する研究）によって印刷・製本しました。





墨東大学とは何か



## 墨東大学とは何か

「墨東大学（ぼくとうだいがく）」は、まちや地域コミュニティとの関わり方を〈大学〉というメタファーで理解し、日常生活や社会関係のあり方について考えるための仕組みです。

学校教育法上で定められた正規の大学ではありませんが、墨東エリア（隅田川と荒川、そして東京スカイツリーのすぐ横を流れる北十間川によって囲まれた、墨田区の北半分を占める地域）を、人びとが集い、のびやかに語らう〈学びの場〉としてデザインし、コミュニケーションの誘発を試みるプロジェクトです。講義・講座として提供されるコンテンツのみならず、課外活動や大学まちの役割もふくめて、全体を構想する試みです。私たちがとくに力点を置いているのは、場づくりです。既存のさまざまな実践の理解、地域資産（local assets）の評価・再評価をつうじて、多様な関係の可能性を見いだすことも重要な課題として位置づけました。

近年、まちや地域コミュニティとの関わりを実現する方法として、オープンな場づくりや、さまざまな形態の交流プログラムの実践が注目されています（たとえば、ワンデイシェフ、レンタルカフェ、ファーマーズマーケット、クラフト・手作り市など）。墨東大学は、こうした一連の試みをふまえ、〈まちで学ぶ・まちで遊ぶ〉ためのアプローチとして、企画・運営するものです。墨東エリアを「キャンパス」および「大学まち」に見立てて、多彩な講師陣による講義・実習プログラムを提供します。また、大学らしさを演出するための仕掛けを積極的・実験的にまちなかに埋め込む試みです。（註1）人びと（墨東

エリアの外に暮らす若者・大学生、スカイツリーの見物に訪れる人びとなど）を墨東エリアに誘導し、交流やコミュニケーションを誘発する仕組みとして設計されるもので、開校時（2010年10月）には、以下のように性格づけて紹介しました。中長期的な紐帯を育む「墨東大学」は、数か月にわたり、墨東エリアにおける参画と交流の促進を目指します。受講生は、カリキュラムという仕組みによって、期間中に数回、まちに足をはこぶこととなります。成果をまちに還元する講義・実習として提供される学習プログラムが、一方向的にならないよう、受講生（墨大生）は、学んだ成果を何らかの形でまとめ、「卒業制作展」をつうじて墨東エリアに還元することが求められます。関係をデザインする講義科目（課程）のみならず、課外活動やまちとの関わりをもふくめて全体像を描き、まちで学ぶことの意味・意義を再確認します。また、第一期生の「卒業」後のフォローアップや他のエリアへの拡がりも考慮しながら、企画・運営をすすめます。このプロジェクトは、〈大学〉というメタファーを介して地域に接近することによって、地域における人間関係のあり方やコミュニティへの帰属感、多様性・異文化の理解等の可視化を試みるものです。そして、墨東大学の実践過程を分析・考察し、地域コミュニティの持つホスピタリティや関係変革への志向などを理解するきっかけになることを期待して実践をスタートさせました。チラシやウェブでは、入学や学生証、参加方法などについて説明をするとともに、学生や教職員（スタッフ）を募集しました。（註2）

## B 入学について

墨東大学は、リアルな場所につくられるバーチャルな大学です。誰でも・いつでも入学できるように設計しました。墨東大学は、(ほぼ)誰でも入学することができます。入学試験はありません。ただし、墨東大学在学学生、教員、スタッフからの〈承認〉が必要です。

・いつでも入学することができます。ただし、卒業判定会議までに所定の単位を修得しないと卒業することはできません。(つまり、入学のタイミング次第で卒業できないことがあります。)

・初の試みなので、定員は 60 名程度を想定しています。

・もちろん、学費は必要ありません。

・正しい方法によって、学生証 (ID カード) を手に入れてください。学生証を手にした時点で正式に墨東大学の学生となります。

## B 承認制度について

通常の大学には入学試験がありますが、わが墨東大学では、全国に先がけて入学試験を廃止しました。というより、もともとリアルな大学ではないので、入学試験については、あまり考えていなかったのです。墨東大学は仮

想の大学ですが、それでも〈リアル SNS〉のような仕組みとして構想されています。つまり、友だちの〈承認〉があれば、入学できるということです。最初は、墨東大学の企画・運営を担っている bockt の関係者からはじめて、徐々に広がっていきます。

## B 学生証 (ID カード) の発行方法

・〈承認〉された人には、随時、墨東大学の学生証 (ID カード) が発行されます。墨東大学の学生であることを示すカードなので、大切に取り扱いってください。

・公共交通機関や入場料金等に適用される、いわゆる「学割」の発行はムリです。

・学生証 (ID カード) の提示によって、墨東大学ブックストアで販売されている書籍・冊子・グッズの一部について、割引価格が適用されます (予定)。

・学生証 (ID カード) の提示によって、墨東エリアにある所定の飲食店の利用について、割引価格が適用されます (予定)。また、墨大生だけのメニューや特盛り (墨大盛り) もあります (予定)。



|           | Date | Instructor | 日付 |
|-----------|------|------------|----|
| 向島楓論 [54] |      |            |    |
| 卒業制作 [34] |      |            |    |
| 1:        |      |            |    |
| 2:        |      |            |    |
| 3:        |      |            |    |
| 4:        |      |            |    |

## B 講義・実習への参加方法

- ・学生証を手に入れたら、さっそく履修計画を立ててください。
- ・まず講義概要や学事日程（時間割）を確認し、受講したい講座をえらびます。アイコンが表示されている科目については、参加表明をすることができます。アイコンをクリックし、表示されたページで内容や時間、場所等を確認してから [Yes] のボタンをクリックしてください。
- ・かならず事前登録をしてください。講座によっては材料の準備や場所のセッティングの都合がありますので、事前に参加予定者の人数を把握しておく必要があります。また、ドタキャンは極力避けてください。予定の変更などの理由で受講を取りやめる場合には、事

前に登録ページに行き、ステータスの変更をお願いします。

・墨東大学での開講科目への参加・出席状況は、学生証（ID カード）裏面の表に記録されていきます。いわゆる「スタンプカード」のようなものです。墨東大学の講義に出席する際にはかならず携帯し、必要に応じて提示してください。

・各講座の修了時に、担当者がスタンプ・サインをします。

## B まとめ

このように、墨東大学は、ウェブを介した情報提供や登録を可能にしながら、墨東というリアルな場所で集う仕組みとして、構想されました。（加藤文俊）

註1 bockt（編著）（2011）『墨東大学の挑戦：メタファーとしての大学』墨東大学出版会 p. 10-13の一部を修正して再掲載しています。2011年度は2年目としての運用でしたが、プロジェクトの主旨や活動方針は変わっていません。

註2 この文章は2010年度の『墨東大学』オフィシャルサイトに掲載された情報をもとに再構成しました。

<http://bokudai.net/2010/about.html>

<http://bokudai.net/2010/entrance.html>

# B 墨東大学キャンスマップ

## Bokuto Univ Campus Map

墨東大学のキャンパスは「まち」そのものです。まちなかで行われた様々な講座をプロットしました。











# 壁に地図する 1

2011年4月30日(月)

担当者

bockt+(加藤・岡部・木村・香川・中島)





まずは、地図を作る壁のペンキ塗りと壁の修復から始まりました。2011年1月9日に行われた講義【ペンキを塗りますI (bokut)】に参加できなかったので、今回は「是非参加したい!」とっていました。しかし、ほぼペンキを塗る作業はなく、ひび割れてしているような細かな部分をさらに白く塗り足す感じでした。初めての体験だったので、非常に楽しかったです。さらに手にペンキがついたのを見て、『(ペンキ塗りと言えば) これこれー!』みたいな感覚がほとぼりしました。

もう一方では壁の修復が行われていました。3月11日の大地震で剥がれしまい、そのまま放置されていた壁でした。これを見るたびに、京島校舎で地震に遭遇した時の記憶が蘇ってきます。壁に「かくし釘」と呼ばれる釘を打ったり、生クリーム状のものを壁と壁の間に塗ったりしました。この作業では、木村さんの奥さんにご指導いただきました。なんでも木村家のリフォームを担当しているらしく、慣れた手つきで作業を見て、その場にいた人から「おー!」という歓声飛び出しました。

壁の修復も一段落して、いよいよ本題へと突入しました。白いペンキを塗った壁に変幻自在的なマスキングテープ(?)を使い、京島校舎を中心とした京

島エリアの地図の制作に入りました。まず、プロジェクターで壁に地図を投影してから、シャーペンで曲がり角に印をつけました。これがかかなり大変な作業で、自分の体で影を作ってしまう、「投影させた地図が見えない」という苦戦を強いられました。影を作らないように、うまく身体を反らせながら行いました。

印をつけ終えた後、印をつけた曲がり角を目印に、京島のエリアをマスキングテープで形作っていきました。これもまた難しい作業で、なかなか平行にテープを貼れなかったり、地面から20cmぐらいの低い位置では貼ることすら困難であり、楽しい反面想像以上にちょっとキツかったです。

用事があるため、1/4まで完成したのを見て、京島校舎を後にしました。

これが壁一面に完成し、講義の軌跡とか書き込んでいけたら、きっと二期目の終りにはすごいものが仕上がるんだろうな、と感じました。

次回の5月4日(水、祝)13:00~【壁に地図するII】京島校舎

[http://twtvite.com/bokudai\\_110504](http://twtvite.com/bokudai_110504)

でどこまで進んだのかを見るのがとても楽しみです!

中島和成

## 壁に地図する 2

2011年5月4日(金)

担当者

bockt+(加藤・岡部・木村・香川・中島)



京島校舎に到着すると、すでに木村さんが作業を始めていました。前回の【壁に地図するⅠ】で木村さんがおっしゃっていた「壁に貼りつけたマスキングテープは数日後、剥がれるかもしれない」ということが、実際に5日経過した今日、現実のことになっていました。私が訪れた時にはすでに木村さんが修復して下さっていたので、マスキングテープが剥がれているのを目にすることはほぼありませんでしたが、一番最初に見つけたらかなり凹むだろうなと悲しくなりました。

前日も参加していた木村さん、渡部くん、そして今回初めての香川さん、岡部研究室の3年生と4年生、墨大の卒展の時に初めて来校してくださり、興味をもって今日の講座に参加して下さった方、自分も含めて計7人が参加しました。

まず、自己紹介から始めました。名前や所属の他に、現在の近況的なことを話しました。その内容からはお引越しゃ飲み会、実家から帰ってきたばかりなど、どうやらみなさんお疲れムードのようでした。…というか、5/7人はそのような感じで、先行き不安のまま、始めました。

前回は加藤先生、木村さん、岡部先生、そしてゼミ長だった渡部くん、ワークショップを数々こなしてきた丸山くん、渡邊くんがいたので、そんな協力的な方々の後ろについていけばなんとかなるだろうな、半ばそんな気持ちでいました。しかし、前回から引き続き参加していたのは木村さんと渡部くんの二人だけでした。そのため内容を把握していたので、継続して作業に取り組んでいました。そのため、プロジェクターに地図を投影して、前回テープを貼っ

て作った地図に合わせてという作業において指示をしつつ、一方でアドバイスをもらいつつ、作業を行っていきました。前回(4/30)もそうだったのですが、休日で人通りが多いため京島校舎を通りかかる際、たくさんの人が立ち止まって見てくれました。立ち止まらずとも、横目でちらちら見ながら、歩いていました。小学生ぐらいの小さい子から、ご高齢の方まで京島校舎を気にかけてくれました。小さい子は、すぐ声を出して『何やってるのー?』、『落書きしていいのかな?』とお父さんやお母さんに言っていました。30代ぐらいに方になると、墨大の活動に興味をもってくださり、質問などしてくれました。また、興味をもってしてくてるのかなと思ひ、個人的にお話をかけやすかったです。60、70代ぐらいの方は京島校舎の前に立ち止まり、まじまじと長い時間見ていく方が多く見受けられましたが、話しかけてくることはほとんどありませんでした。

たった2日間の出来事でしたが、両日参加できたおかげで、歴史の目撃者になれた気がして、嬉しかったです！

最後に... これもまた前回同様になってしまうのですが、木村さんや香川さんはごくごく普通に果物屋さんのおかあさんと会話をしていました。岡部研究室の3年生の子も、帰り際に『さよならー』と声をおかあさんにかけていました。ご近所さんに話しかけに行くことができず、京島校舎内だけで完結させてしまっている自分がいました。これならわざわざ墨田区来るだけ無駄じゃないか、と感じてしまいました。この感じ、どこかで打破せねば...

中島和成

## 大人の直線縫い講座

2011年6月12日(日)

担当者

松浦李恵・荒木夏実・岡部大介

墨東大学を手触り感のある存在にするために、様々なダッフィーサイズで墨大の「コスチューム」を作成します。作成する「コスチューム」は、卒業式用のマント、チアリーダーの衣装、普段使いのTシャツなどを想定しています。当日はミシンと布を京島校舎に持ち込み、直線縫いに造詣の深い現役墨大生の指導のもと作製します。完成したコスチュームをダッフィーが着用し、京島校舎周辺で撮影会を行います。その写真は、京島校舎の壁に描かれた「地図」に掲示したいと思います。



「せんせーは我慢との戦いなのです。」この授業は墨東大学の制服（海外の大学にあるマントのような）・チアリーダー・Tシャツを直線縫いでダッフィー（クマのぬいぐるみ）サイズで作る授業です。講師である私は、当日までに、衣装のサンプルをつくり型紙を用意して当日を向かえました。向島校舎の椅子やテーブルを端っこにどかせて、その上にミシンを2台並べて設置。床にはブルーシートをひき、上からひざ掛けをひいて実習室の完成。靴を脱いで作業してもらおうようにしました。私ที่บ้านで作業しているスタイルに近づけました。

今まで人に事を教える機会があまりなく、自信がありませんでした。ですが「生徒に絶対手を出さない（変な意味ではなくて）」と心に誓って授業を始めました。これは、私が手を出してしまったら生徒の作品ではなくなってしまうからです。

1着目は難易度の低い制服から。切った型紙を布にあててチャコペンで型取りする作業。生徒から「なんでこの型紙でマントになるの?」「えっ、これは何処の布?」など質問責めが。最初のうちは、理解してもらおう!と頑張って説明したのですが、なかなか理解してくれなかったりしました。伝わらないもどかしさで気持ちがいっぱいでした。普段一番速い速度でミシンがけをしている私は、一番遅い速度のミシンがけをただひたすら見守るというウズウズ耐久レース時間でした。縫い方、ミシンの使い方を教えてその後は見守るのみ。

ただひたすらに。

ただか直線、されど直線。



焼き鳥の香ばしい香りとガタガタとミシンをかける音が入り混じる向島校舎。入口に私が作ったサンプルの制服を着たダッフィーを看板の下に展示に可愛いーっと言ってくれて、話しかける一つの手段になっていました。私たちにとっても、校舎の前を通る人にとっても、商店街のド真ん中でミシンをかける異様な集団を気にならないわけがないと思うので、いいきっかけの材料でした。

みんなで同じタイミングで作業開始したのでだいたい同じ時間に完成。16:00 過ぎでした。私の予定では制服・チアガール・Tシャツを作っても時間が余っちゃう事を予想していたのに、まさかの一着のみ・・・初心者をなめていました。私が以前リハーサルを行った時、制服を作るのにかかった時間は30分以内だったので、教えながらならかかって一時間ぐらいだろうと思っていたのですが・・・

初心者のなんで?なんで?な気持ちは教える側にとって、「そこ気になるのか」と新たな発見でもありました。また、効率の悪い動作にイライラしては負けなのだたと学びました。

ましてやそれを生徒に悟られたら、敗北。



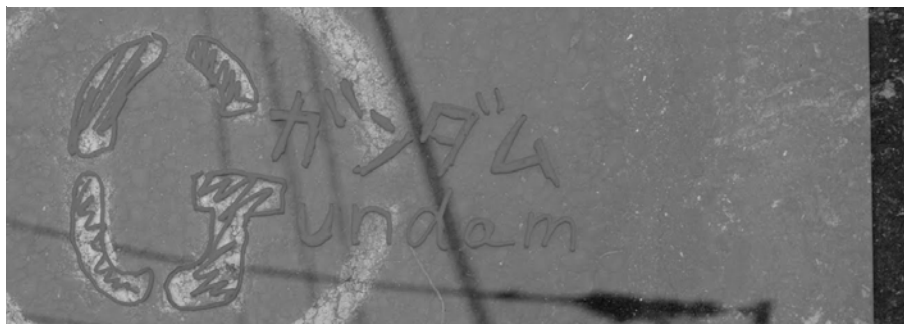
## アクリル板電腦コイル

2011年6月25日(土)

担当者

3601

日頃お世話になっている京島校舎のお向かいの果物屋さん。果物屋さんを「借景」して、アクリル板越しにお店を撮影します。撮影は、京島校舎に固定したカメラから。アクリル板に描かれたテキストやイラストと、背景にある京島の実景の風景が連動して、ひとつの物語を紡ぎます。







スカイツリーが実は完成したという話に盛り上がり、上層部にあるクレーン車をどのように撤去するのかを談義しながら、14時に、京成曳舟駅そばのイトーヨーカドーに集合。アクリル板と水性のカラーペン8色とともに。その大きな理由は、今日アクリル板に描いたインクをその場で消すための「アルコール入りのウェットティッシュ」を入手するため。これで、アクリル板に描いた文字やイラストを消すために、逐一水分を求めなくて済むようになる。

アクリル板はだいたいA3サイズ。路上で撮影を行うにはちょうどよい。手始めに、まちの中の消え去った文字をアクリル板とペンとで補う作業を行っている。既にこの行為だけで、まちなかにいたずら書きをしている気分になって高揚する。

いざ撮影となって、想像以上にアクリル板に外界の風景が反射し、写り込んでしまうことが判明。カメラの位置や構図をかなり考えなければならない。この撮影が思いのほか楽しく、朽廃した風景の補完、そして「いたずら書き」モードを志向するようになる。次にターゲットとなった電腦コイルスポットは、たまたま行き着いた曳舟小学校の隣の道。20分くらい滞在したが、車が1台か2台来た程度で、絶好のアクリル板電腦コイルスポットだった。視界に入るものすべてが撮影対象になる。路上の「止まれ」の文字やGのマーク、捨てられたテレビ、道路……。それぞれで、電腦（実際はアナログ）アクリル板を通して見える世界と、普段の世界と両方撮影していく。Gのマークは、電腦アクリル板を通すとガンダムのロゴになり、捨てられたテレビのモニタは授業タイトルが見えてくる。何ということのない普段の日常空間が、電腦アクリル板を通すことで変化する。そのくだらなさに興奮したのと、雨が降りそうだったので、その前にキラキラ橘商店街に到着するよう急ぐ。途中、スカイツリーを借景して授業ロゴを電腦アクリル板を通して空に描いてみたり、家屋に窓を付加してみたり。

キラキラ橘商店街では、たいやき屋さんでたいやきパイとたいやきのお好み焼きを購入し、果物屋さんでマンゴーアイスを購入。それらを食しながらアクリル板に初音ミクを描き、商店街の中や神社にて撮影会を続ける。意外や意外、デジタル一眼レフカメラよりも、iPhoneのトイカメラで撮影した方がきっちりペンの色がでて、面白い写真が撮れた。16時、夕立とともに京成曳舟駅にて解散。

鰐淵久美

## クロタヌキ教授の巣学

2011年6月25日(土)

担当者

クロタヌキ・立石沙織

この講義は、墨東大学界隈にあなただけの巣を見つけるフィールドワークです。生き物にとって「巣」は、「家(home)」であり、生きていくための「拠点(base)」でもあります。巣作りの上で一番大切な条件とは何でしょうか。それは生き物によって、人によって違います。自分にとって気持ちのよい居場所(巣)とはどんな場所なのかを考えることで、自身を見つめなおすことができるでしょう。そして最終的に参加者の生態を赤裸々に綴った「図鑑」を完成させます。

京成曳舟駅で立石さんと合流。立石さんとは、以前向島・京島のまち歩き以来だった。事前に企画の内容を読んで、「要するに「巣」を見つければいいんだろうな!」といった浅はかな知識だった。11時になるにつれ、アートユニット「クロタヌキ」の方々と参加者が集まった。自分以外、知り合いの方同士だったので、人見知りの激しい私にとって、少しばかり不安だった。私が先陣を切って、京島校舎まで道案内をした。京島校舎に着いてからは、本日の講座の説明と、おそらく本日のメインの一つでもあるソーラークッカーの準備をした。「えっ、これでやるの?」と思わんばかりの画用紙が一枚…これを説明書通りに組み立ててみると…

いかにも太陽の光を吸収しそうな形へと姿を変えた!準備が整い、校舎の前に全員分のソーラークッカーを並べた。しかし今日はあいにくの曇りだったので、果たして生たまごかゆでたまごへと姿を変えるのか不安を残しつつ、京島校舎を出発した。私の案内のもと、向島百花園を目指した。いつの間、人に向島・京島の道案内するまでになったのだろうか。この周辺の地域に詳しい人がいると思うが、果たして満足してもらえるような案内が私にできるのだろうかと不安に思っていた。どうやら、立石さんが巣を見つけたようで…



この講座のメインは、「見つけた巣に自分が入って、それをチェキで収める」というものだった。チェキの即時性には感動した。最近、デジタル一眼でなんでも撮り直して、気に入った写真を選んで、自宅に帰ってから情報を共有していたのに対して、チェキは撮り直しがきかないし（データとして消せない）、その場で共有ができたことが新鮮で面白かった。「なるほど！こういう感じなのね」と、段々今回の講座を理解してきた。鳩の街通り商店街を通り、向島百花園に到着！ここまでの振り返りを含め、しばしの休憩。

すると突然の雨が！ふと頭の中に浮かんだのは、ソーラークッカーのこと。この数時間でソーラークッカーに対して、愛着心が湧いてしまったみたいで、すぐ京島校舎に戻りたいと思った。

京島校舎への戻る際、巣になりそうな細い路地を選んで歩いてたら、道に迷ってしまった。クロタヌキの方に、『なかじくんがいなかったら、絶対道に迷ってたよ』など言ってもらえたのが嬉しくて、道に迷ったことを素直に言えず、iPhoneのマップをこっそり見て、京島校舎に戻るまでの道の確認をした。

京島校舎に戻ると、果物屋のおかあさんが『雨が降ってきたから、場所移動しておいたよ』と声をかけてくれた。突然の豪雨だったのにも関わらず、ソーラークッカーを心配してくれて、雨の濡れないとこに移動させてくれるなんて、本当に優しいおかあさんだなと、感謝の気持ちでいっぱいだった。みんなでゆでたまごが出来ているか確認をした。やはりこのお天気では、さすがにゆでたまごへと姿を変えていな

かった。（半熟にも届かず…）

それぞれが自分の見つけた巣の写真を手に取り、完成させた図鑑がこちら！



このあと東向島珈琲店に場所を移して、それぞれが完成させた図鑑を見せ合った。立石さんやクロタヌキの方々は、「巣」を見つける際に、まず屋根があるかどうかを確認するらしい。一方で中島が見つけた「巣」には、屋根がなかった。お互いのを見返すことで、自分になかった気付きを発見できて、面白かった！

中島和成

## 4 コマでまちを表現しよう

2011年6月27日(月) 15:00～18:00

担当者

中島和成

フィールドワークを行う上で、気になった物事を写真や映像に収めたり、出来事を文字でまとめたりすると思います。この講義ではそのフィールドワークの結果を、オリジナルの「四コマ」として、その場でまとめてもらいたいと考えています。起承転結としてまとめあげることで、読み手や聞き手を飽きさせることなく、楽しませることができるのではないのでしょうか。この講義を定期的に行い、まとめたものを何らかの形として残せたらと考えています。



いよいよ、企画から準備まで行った講義を開講することになった！講義内容を墨大のHPにアップしてもらってからはというもの、誰が参加してくれるのか楽しみで仕方なく、ほぼ毎日参加者の欄をチェックし続けた。…がしかし、一向に参加者が増えなかつ

た。『所詮、自分が考えたことなんて相手にされないのか』、『自分の人脈って低いなー』とか思いつつ、当日を迎えた。もしかしたら、講座当日の15時になったら誰か飛び入りで来てくれるのかもしれない、とか期待に胸を膨らませていた。前日の夜も『ど

んな感じに進めていこうか?』、『どんな四コマにしたら、ウケるのかな』など考えながら、就寝した。

結局 15 時になっても、参加者は現れず、「15 時に京島校舎のシャッターを下ろして、まちにネタを探しにいこう」というスケジュールを変更して、1 時間校舎内でネタを探した。『さすがにもう誰も来ないのでは?』と思い、16 時にシャッターを下ろし、ネタを探しに出掛けた。

ネタ探しの最中に恥ずかしかったことと言えば、京島校舎にいたダッフィーを連れ出してポケットパーク内で撮影を行ったこと。人目につかないのでないかと思って選定した場所であったが、一人またひとりと通りかかりに横目でちらちら見られた。別に悪いことをしてるわけではないのだが、20 歳を越えた男がくまのぬいぐるみを被写体として撮影していることに後ろめたさを感じていた。どうしてもコマに自分を登場させたかったので、シャッターを切ってもらってもお願いもできなく、セルフタイマーで撮影を行うことにした。セルフタイマーの時間調整を間違えての一枚…

ちょうど雨が上がっていたので、そのまま京島南公園まで行き、気になったものを所々写真に収めた。

京島校舎に戻ってからは、四コマの編集作業をパソコンで行う予定だったが、カードリーダーを忘れてしまい、デジタル一眼で撮影した写真をパソコンに移せず、紙に下書きを行った。企画を行う者として、準備が足りなかったなと反省。この期に及んで、『参加者がいなくて良かった〜』と安心している自分がいた。

今回やってみて…実際の大学の先生やアーティストさんなどにとっては、参加者をもたずに講座をやることはおそらく新鮮で新しい発見があるかもしれないが、自分にとっては「(自分の作った四コマの)反応がもらえない」ことや、「他の参加者の視点を知ることができない」など、この講座に意味はあったのだろうかと不安に感じた。そこを通りがかった方に「シャッターを切ってもらおう」とか、「自分の作った四コマを見てもらい、反応をもらおう」ことができればいいのだが、まだどうもその段階まで踏み切れなかった。これにあきらめず、また企画をしてみよう!

果物屋のおかあさんから、『今日は、おにいさん一人?』と話しかけられ、バナナを頂いた。一人の時にバナナを頂けたのは、なんとこれが初めて! 通りかかりに差し入れを頂けたりする関係性(こういうなんて言うのでしょうか。気兼ねない関係性?)を創り上げていきたいと考えている。そのためには、果物屋のおかあさんや、まちの人にとって、もっと目に見える形で還元していけたらいいのだけど、と思った。

中島和成

## 文庫のまちを歩く

2011年7月23日(日)

担当者

木村健世

まちには数えきれないくらいの「物語」が眠っています。それはまちに住む人達が日々の暮らしの中で紡いできた沢山の物語です。まちは沢山の物語が折り重なって出来ている一つの文庫なのです。墨東のまちを散歩しながらまちの人々の記憶の中にある「物語」を聞き出し、普段は見えづらいまちの姿を浮かび上がらせるのがこの講座の目的です。当日は一人につき1物語を目標に、きらきら橘商店街でインタビューを行います。そして集めた物語にタイトルをつけ、あらすじを併記した「文庫目録」をつくりまします。※この講座は今期中に合計3回を予定しています。最終的に集まった物語3回分をまとめ「墨東文庫・文庫目録Ⅱ」として発行する予定です。

### おおよその時間割

13:00～13:30 ミーティング 説明

13:30～15:30 インタビュー散歩

15:30～16:30 各自タイトル、あらすじ文を考える

16:30～17:30 京島校舎の「地図黒板」にタイトルとあらすじをプロットしながら発表会

日時：7月3日(日) 13:00～18:00頃

場所：キラキラ橘商店街周辺

集合場所：墨東大学京島校舎(当日12:50までに集合してください)

参加人数：10人くらいまで



2010年に「墨東文庫」というアートプロジェクトをここ京島で行った。まちに住む人々が紡いでできた物語を集め、文庫目録にまとめて京島のまちで配布した。集めた物語には小説的なタイトルをつける。そしてその物語のあらすじを併記した。

まちは一つの「文庫」でもあり、そこに潜む物語は星の数ほどあるはずだ。僕が2010年にプロジェクトのために集めた物語は25個。もちろんこれは無数に存在する物語のうちのごく一部であり、言わばまちを文庫として経験するためのサンプルのようなものだ。2010年に集めたもの以外の物語も知りたいという思いと、取材をする楽しさ、人と会おう楽しさが今でも忘れられず、さらにそれを他の誰かにも経験してもらいたいという思いから、この「文庫のまちを歩く／みんなで墨東文庫をつくる」という講義を行うことにした。特に「出会う」ことの喜びは普段の生活の中ではなかなか得られないことかもしれない。僕自身も「プロジェクトを行う」という動機が無ければ自ら進んで人にアクセスすることは滅多にしない。そしてこの「出会う喜び」は必ずしも「楽しい」とか「嬉しい」などの明るい感情だけを伴うものではない。時に冷たくされ寂しい思いをしたり、相手を不快にさせてしまって後悔の念に駆られたり、強面の人の前で直立不動で立ち尽くすこともある。こういった少しほろ苦くほの暗い経験を得ることも多々ある。

この苦く暗い経験も含めて「出会う喜び」なのかもしれない、と言ったら捻くれ過ぎかもしれないが、まちや人を「知る」事はいずれにせよ一筋縄ではないかない醍醐味がある気がしてならない。

講義当日は合計4人で京島のまちに出かけた。それぞれが街中で気になった人、目に付いた人にそれとなく話しかけてみる。恐る恐る。「忙しいからまた今度ね」とあっさり話を断ち切られることもあれば、何かのセールスかと思われ、そそくさとその場を立ち去られることもある。外は夏の日差しが厳しい炎天下だ。挫けそうになる瞬間。しかし粘り強くまちを歩けば、初対面の僕達に気軽にまちの歴史、自分が住む家の歴史を離してくれる人もいる。身の上話を1時間以上話してくれる人もいる。屋下がり公園で酔っ払っていたおじさんなどは、自分が入っていた刑務所の話までしてくれた。下町だからといって必ずしも誰もが気さくというわけではない。けれどちょっとだけ粘ってみれば自分の「物語」を語ってくれる人にも出会える。

まち中でひととおりの取材を終え、京島校舎に全員帰還。各々が持ち帰った「物語」にタイトルを付けあらすじをまとめる。それを墨東大学自慢の地図黒板に書き込み、その前に立ち取材者自らが物語りを語る。出合いのきっかけや話した印象、ハプニング、もちろん物語の内容。ついさっき得たインプットを臨場感たっぷりに、興奮気味に、そして若干の疲労感を滲ませながら語ってもらえた。それは紛れも無いまちの物語であり、まちに住む人達の物語。そして彼ら取材者自身の物語にもなっているようにも感じることができた。よそ者4人が悪戦苦闘しながら夏の京島のまちに溶けかけた一日だった。



## ミニмумアーバニズム Ⅲ

2011年7月16日(土),7月17日(日),7月23日(土)

担当者

木村健世

商店街に置かれたベンチで何気ない会話を交わす人達。これは誰もが見た事のある光景ではないでしょうか。ひょっとしたら、あなたも実際に店先のベンチに腰掛け、気の合う仲間もしくは見知らぬ人との会話を楽しんでた経験があるかもしれませんね。この講座ではそんな商店街のコミュニケーションツールの一つである「ベンチ」を作成します。クライアントである商店の店主にインタビューを行い「どんなベンチが欲しいか」を聞き出しデザインを考え、実際に制作します。みんなで作った一つのベンチは商店街に挿入された時に、どのようなアクティビティーを誘発するでしょうか? 「最小限の都市計画」を一緒に実践してみましよう。



2010年の墨東大学講義「ミニмумアーバニズム」では二つの椅子(ベンチ)を作成し納品した。一つは薬局のレジ奥の狭小スペースで使う椅子。奥行き30cmしかない場所で半座りの体勢で仕事をするための椅子だ。もう一つは、墨東大学京島校舎隣のもつ焼きやさんの為のベンチ。店先に置いて、そこで常連客たちが酒を酌み交わすためのベンチだ。どちらも特殊なシチュエーションにあわせたワンメイドの椅子。さすがに僕達は家具作りのプロではないので施工精度には若干難があったけれど、「プロではない」からこそ特殊なオーダーもあっさり聞いてしまえた部分はあったと思う。また「プロではない」からこそ、お隣のもつ焼き屋さんで飲んでいる職人さんがアドバイスしてくれたり材料を提供してくれたり、まわりからの手助けを得られたことも、こ

の「ミニмумアーバニズム」の面白さだった。「椅子を作らせてもらう」という行為をとおして、まちからの力を得る。そして最終的にはまちの人達にとって少し役立つものを提供する。少しだけ寄与できる。そんな様々なまちとのやりとりを経験できたのは貴重な体験だった。そして2011年夏、再び「ミニмумアーバニズム」を行った。今回のクライアントは、京島一丁目の「曳船湯」さん。昭和のはじめから営業している老舗の銭湯だ。クライアントと言っても先方から依頼が来る、というわけではない。直接「クライアントになってください」「椅子を作らせてください」とお願いに行くのだ。不思議な営業というか。いずれにせよここから「ミニмумアーバニズム」はスタートする。曳船湯さんは外装、内装ともに開業当初から手を加えておらず、当時の



霏雨気をそのままに残している。重厚な屋根や梁、美しいタイルが印象的だ。今回は男湯の脱衣場に置くベンチを製作させていただくことになった。

## 1日目

集まったメンバー全員で曳船湯さんへ。実測とインタビューだ。下町の歴史ある銭湯の内部空間に溜息を漏らしつつ、ご主人のお話に耳を傾ける。寸法や仕様のオーダー。脱衣場に置くベンチは特に男湯の場合、湯上りに素肌のまま座る事が多いので座面は滑らかな仕上げがいいとのこと。「素肌で座る椅子」を作るのは初めての経験だ。そしてなによりも空間にマッチした椅子でなければならない。昭和の風情をそのまま残してあるのは曳船湯さんのこだわりだ。このこだわりに水を差してしまっては「寄与」とは言えない。大仕事になりそうな予感。実測とインタビューを終えさっそく近場の喫茶店で作戦会議を行う。みんなでスケッチブックにアイデアを書き込みながらあれこれ話をする。やはり話題のほとんどが座面の素材のこと。滑らかで耐水性のある素材……と考えめぐらせた結果、竹で座面を作ることに決定。幸い近場の吾妻橋に竹の専門店がある。営業時間を電話で確認してさっそく竹屋さんへ直行。動きが早いミニマムアーバニズム部隊。喫茶店で描いたスケッチを見せながら、どの竹材がよいかを竹屋さんのご主人に相談する。寸法はもちろん色や節の出具合など竹材の種類も様々で、プロのアドバイスを有難く頂戴しながら材料を選定していった。「へえ、勝手に銭湯のベンチをつくるのか。変わってんなあ」と言いつつも竹の扱い方や施工上の注意などをレクチャーしてくれるご主人。たっぷり竹についてレクチャーを受け、にわか竹のプロになった



ところでタイムアップ。必要分の竹を購入。美しい色と肌触りを持った竹を入手出来、2日目へのテンションが高まったところで1日目は無事終了。



## 2日目

いよいよ施工。まずは前回購入した竹を一定寸法に切る。そして切った竹を並べて座面を構成するのだ。同じ寸法の部材を数十本切り出すのはなかなか難しいのだが、ここでは建築学科出身のO氏が力を発揮する。金尺や鋸を扱う姿もなかなか様になっている。次々に座面の部材を切り出していく。一方で竹の座面を載せる台座を角材で作る。こちらは充分に強度を持たせるために面材をメインに筋交も太目のものを入れて構成した。釘もかなり太いものを使っている。素人なりの配慮（ビビリ？）である。組みあがった台座に竹の座面を並べてみると、完成に近いビジョンが一気に見えてきた。みな口々に「良い！」「品がある」などと自画自賛を口にする。デザインは前二回で作成したベンチと違い保守的だが、部材数が圧倒的に多いために作業量も多くなる。その作業の過程で作り手の「思い」がどのように変わっていくかが今回の「ミニマムアーバニズム」の肝の一つなのかもしれないと感じた。この日の作業がひととおり終了し、仮組みしたベンチに腰掛けてみると、買い物途中のおばあちゃんがとなりにおもむろに腰掛けて話しかけてくれた。まだまだ、ベンチは未完成だけど素敵なシーンだった。座る場所が



あれば、そしてその座る場所の幅が二人分以上あればそこに会話生まれる。「あたしも自分ち用に椅子オーダーしたいわ」とおばあちゃんは語っていたけど、その後どうなったかな。

## 3日目

最終日。この一日で完成まで持っていき曳船湯さんに納品する。間に合うか。途中、座面の竹の節が、素肌で座ると意外と気になるかもしれないとの声があり、皆でやすり掛けをしてある程度表面をなめらかに仕上げることに。40枚近くある部材をメンバー全員でやすっていく。湯上りのまちの人達のお尻に気遣う自分達自身を笑いつつも、しかし真剣に座り心地のことを考えながら夢中でやすりを掛ける。そしてこういった単純作業は人間を没頭させる。エスカレートもさせる。皆一様にやすり掛けの技術が向上し、見る見る竹材がスベスベになっていく。気持ちが良い。全員で夢中になって竹をやする光景はまるで、縄文時代の集落での集団作業（見たことはないけれど）を思わせるものだった。まちの人が体感するであろう座り心地を想像し、自分達が滑らかに仕上げる心地よさにも酔いながら作業は続いた。作業終盤、台座にニスを塗る。この頃になる



と、お隣のもつ焼き屋さんで飲んでいた職人さんがちょくちょく覗きにきてくれていた。ニス塗りの工程はなんとペンキ職人さん直々のレクチャーのもと進められていった。「本当はさ、つや消しで少し白っぽいフィニッシュが今風なんだけどさ」と言いつつウォームカラーのニスを塗ってくれた。ウォームカラーは曳船湯さんの空間の風合いにマッチングさせたものだ。仕方が無い。そして最後は全員で仕上げた座面を台座に打ち付けていく。辺りは日が落ちつつあり納品の時間が迫る中、無事完成。歓声が沸き起こる。やすりの掛け過ぎで手がしびれているし、暑さでへとへとに疲れているけれど皆笑顔。実際座ってみても強度的には問題なさそうだ。さっそく納品に。やはり何度納品を経験しても、この瞬間だけは緊張する。気に入ってもらえるか。嫌な顔をされないか。曳船湯さんの重い戸を開けて中に入り、ご主人にお披露目。すこし目を丸くしたご主人が「うーん、こんなの貰っちゃっていいの?」と言ってくれた。合格かな・・・少し緊張がほぐれる。実は曳船湯さんがある場所は、地区の開発計画の範囲に入っているらしく、もしかしたらあと数年で建物を取り壊す可能性もあるらしい。「いつまでこの場所があるかわからないけど、使わせてもらうよ。」



とご主人に言っていただけた。この建物の最後の瞬間まで僕達が作ったベンチが使われてもらえるのは光栄だ。そしてそこでまちの人達が「最近どうだい。」みたいな何気ない会話を交わしてくれるのならさらに光栄だ。僕は作業で疲れた身体を癒すためにそのまま曳船湯さんのお風呂に入った。これから先あのベンチでどんな会話が交わされるのかを想像しながら。

木村健世

## 墨東でナタプリ

2011年10月16日(日)

担当者

加藤文俊



まちには数えきれないくらいの「ナタデココ」と「プリン」があります。「ナタプリの会」は、至高のナタデココとプリンを求めて、5年ほど前に活動を開始しました。活動内容は簡単で、参加者一人ひとりがプリンを持ち寄り（会の名称は「ナタプリ」なのに、なぜかナタデココにこだわる人は、最近いなくなりました）、順番にひと口ずつ食べて、あれこれ品評するだけです。味はもちろん、値段やパッケージのデザインなどもふくめて、順位づけをおこないます。利き酒や食べくらべの宿命ともいうべき問題は、だんだん舌の感覚が鈍くなるということで、プリンの場合、口のなかがかスタードやカラメルようになってきます。水を飲んだり、辛いもの（あられ、おせんべい、漬け物など）を間にはさんだりしながら、会が進行します。甘い→辛い→甘い→辛い→甘い…の無限ループに、自らを投げ込む勇気が必要です。

いっぽう、参加者としては、せつかなので、じぶんが買って来たプリンを優勝させたいと考えます。じぶんで作ったわけでもないのに、持ち寄っている時点で、すでに「我が子」のようにプリンに愛情を注いでいるから不思議です。よく、わかりません。買う段階でも、厳しい目でえらぶわけですが、もうひとつ重要なのは、どのタイミングでみんなにプリンを食べてもらうかという判断です。最初は、どうしてもやや厳しい評価になりがちです。後半になると、みんな無限ループから抜きたい気持ちが強いので、わりと適当なコメントになります。あまりにも高評価なプリンの後に、じぶんのプリンを出すと、そのギャップで不利になります。…などなど、ごちゃごちゃ考えながら食べるのです。

ナタプリの会の会員（墨東大学とは直接関係ありません）は、第10回記念のナタプリの会（2010年9月）で配布された、限定特製スプーン（シリアルナンバー入り）を持って、参加です。

今回は11回目の開催で、「墨東大学」とのコラボ企画として、墨東エリアに眠る「ナタプリ」をさがし、みんなで食すことになりました。（原則として）隅田川の東側で購入されたプリンを持ち寄ることとし、参加した9名が持ち寄った10種類のプリンを順番に食べました。近年の「なめらか」流行りは東京の東側にも伝播しているようで、今回は、やや個性に欠けるプリンが多かったという印象です。参加者全員で協議の上、本日のMVP（Most Valuable Pudding）は、domremyに決まりました。

じつは、京島校舎は、ナタプリの会を開くのに便利だということに気づきました。あの量のユニット家具にプリンを並べて撮影できるし、黒板壁にプリンの一覧を書いて、あれこれ言いながら、プリンストーミングをするのに適しているのです。

なお、ナタプリの会については、ほとんど更新されないオフィシャルサイトがありますので、興味があるかたは、どうぞご覧ください。

<http://natapuri.net/>

加藤文俊



# チャリティー植木市

2011年10月30日(日)

担当者

加藤文俊 木村健世 木村垂維子

アーティスト村山修二郎さんの震災復興プロジェクト「チャリティー植木市」と墨東大学のコラボレーション。墨東大学京島校舎で行われる植木市と同時開催で缶バッジやTシャツ、墨大カレーなどを販売します。



10月30日、ここキラキラ橘商店街では「京島文化まつり」が行われています。墨東大学の京島校舎の中にも、まつりのにぎやかさが伝わってきます。太鼓や笛の音、いつもよりも多い人通り、通り過ぎる人達の笑顔。今回はこのにぎやかなシチュエーションの中、京島校舎にてアーティストの村山修二郎さんが震災復興の為に「チャリティー植木市」を行います。我々墨東大学はそこに便乗(?)しながら、墨大グッズや墨大カレーの販売を行おうという計画。ちょっとした学園祭のようなイメージです。

村山さんが京島校舎の前にズラリと並べた植木は、どれも京島エリアの人達がご好意で寄付してくださったものばかり。これを販売して得た売り上げを全額、東北東日本大震災の被災地に義援金として送るプロジェクトです。

何年もの間、このまちで路地園芸に着目した活動を行っている村山さんならではのチャリティーです。我々墨大スタッフも、村山さんの植木市を見ながら、あの日、3月11日に思いを馳せます。ちょうど2011年の3月11日は墨東大学の卒業制作展の会期中でした。京島校舎に常駐していたスタッフと学生はここであの恐怖を感じ、そして不安でどうしようもない気持ちを抱いたまま歩いて家に帰りました。あの日から皆、何かを考え、そして何かを行動に移しています。村山さんはアーティストの中でもいち早く行動を起こした人物で、この日私達はその姿に多くのことを感じました。私達墨東大学の人間は、このまち、京島でのこれまでの体験をこれからの未来のために活かしていくことができるはず。そんな勇気を村山さんにいただいたような気がしてなりません。

そして、私達墨東大学チームは、販売するカレーの準備や缶バッジ作りに動きます。カレーはナンを焼きながら販売、そして加藤さん描きの激レア墨東缶バッジは、ひとつずつカプセルに入れられ、さらに「ガチャガチャマシン」に充填していきます。このどちらも後の展開につながる有意義なものでした。「カレー」は「墨大カレー考」へ、缶バッジは「まちのおみやげプロジェクト」へと。このどちらも、まちから何かを得、それをアウトプットすることで人やまちとのつながりを考えるプロジェクトと言えます。3月11日を境に「つながり」「きずな」という言葉が全国的に様々なメディアで用いられるようになりました。私達は墨東大学を通して、そして墨東というまちを通して、ごく自然に人とのつながりについて考えてきたはず。ゆっくり、でもしっかりと未来について考え、そして行動しよう。そんなことを考えた一日になりました。

木村健世

# Bokudai Halloween

2011年10月31日(月)

担当者

及川萌・友永伊寿葉・盛合さや香・岡部大介

墨大で墨大らしいハロウィンを考えて、実施します。キラキラ橘商店街の中で、「ハロウィン『的』なもの」を探し、そして（おそらく）それを食べます。可能であれば、ジャコランタン作成に取り組みます。京島のカボチャを占有します。



10月31日の東京都市大学横浜キャンパス周辺は、「ハロウィン」だった。ニュータウンを歩く子どもらは授業の一環でハロウィンらしいコスチュームに身を包み、お店の看板にもハロウィンらしいイラストやイベントの文字が踊っていた。当然のようにかぼちゃを使ったパンやケーキの販売も見られた。そ

こから75分、京島校舍周辺で「ハロウィン的なもの」を食そうと散策したけれども、それはかなり難しかった。勿論、京島にはカボチャの煮付けがあった。が、ぼくらが足を運んだのはそばカフェ「天真庵」。墨大職員の中島さんの発案で、京島おしょくじの中の店舗から選ぶということに。もしかした



らカボチャの天ぷらがあるかもしれないという期待のもと、激しくおしゃれな店内へ。

そこから75分、京島校舎周辺で「ハロウィンのなもの」を食そうと散策したけれども、それはかなり難しかった。勿論、京島にはカボチャの煮付けがあった。が、ぼくらが足を運んだのはそばカフェ「天真庵」。墨大職員の中島さんの発案で、京島おしよくじの中の店舗から選ぶということに。もしかしたらカボチャの天ぷらがあるかもしれないという期待のもと、激しくおしゃれな店内へ。

Halloweenということで、仮装する二人。馬のかぶりものや、オレンジの服と、Halloweenらしくありませんか？

食したのは「つけそば」。鳥とネギがふんだんに入った、ほどよい味わいのあたたかいつけ汁に、冷たいそばをちょっと浸して攪り上げる。ジャズが流れる良質な調度品に囲まれた店内で喉を通るソバが心地よい。墨大生の大崎さんがお店の方にかぼちゃの天ぷらがないか問い合わせしてくれたが、残念ながらカボチャにはありつけなかった。

「Bokudai Halloween」の授業を一旦停止し、今日の2限目、「まちに絵を描く」の授業に移行する。約1時間半ほど歩き（歩いた距離は11km）、まちに「B」を描き、ほとほと疲れたところで、押上のcafe soeurへ。これまた天真庵に負けず劣らず個性的でおしゃれなカフェ。290円でコーヒーおかわり自由という点もすごく魅力的。ここでもカボチャの料理をおいていないかうかがうと、一品、トー

ストにカボチャのペーストと野菜を混ぜて軽く焼き上げたメニューがあった。いつの間にかカボチャ料理を食べることがこの講義のゴールになっていたことに違和感を覚えつつも、滑らかな口溶けのカボチャトーストに感動を感じる。カボチャを食べることがハロウィンだという認識を持つことにし、無事にその目的を達成する。



かぼちゃの…ごめんなさい。名前忘れてしまいました。とても美味しかったです！

カフェでカボチャのケーキを食べることになるだろうなとイメージしていたため、カボチャトーストは意外な展開であった。カボチャを食したことに安心したため、3人で今考えていること、今後の進路について、などなどを話し、良質の時間を過ごすことができた。

駅前大規模スーパーでみられるハロウィンとは異なる、Bokudai Halloweenの時間を構築できたと思う。また行きたくなる新しいお店を2件も紹介してもらい、その意味でも良い講義だった。

## まちに絵を描く

2011年10月31日(月)

担当者

安田駿一



GPS 端末を装着して、墨東エリアを歩きながら、GPS の軌跡で絵を描きます。地図を広げて何を描くかを決め、そのルート通りに GPS ロガーを装着して歩いてみます。10月31日(月)、墨大講義「ま

ちに絵を描く」の参加者は京島校舎に集合し、iphone の画面に映し出された墨東の地図を覗き込みながら課題の打ち合わせを始めた。天気も恵まれ、まち歩きには打ってつけの日程となったが、今回の

フィールドワークはまち歩きの振り返りとなるフィードバックの"趣旨"が今までと異なる。「この道を歩いたから、hoge hogeのような発見や出会いがあった」といった具合に、フィードバックの中で様々な感想が生まれるはずだが、本講義ではまち歩きのルートを参加者が歩いている中で無意識的に考え、且つフィードバックの内容の充実をゴールとしていない。立ち止まった位置情報やそれらに付随する情報よりも、むしろGPSでトラッキングしていく"かたち"が味噌になっている。フィールドワークをしている中で軌跡を残していくという作業は、たいていはGoogleMapなどを利用することで可能となり、後ほど自分が歩いたルートを確認するというものが一般的だろう。本講義は軌跡(の形状)を予め決めておき、参加者はそのかたちを意識しながらまち歩きを行なうというものだ。

今回はルートの確認をまち歩きの中で随時行い、画面に表示される進行方向と現在地を頼りに、描きたいかたちに忠実に歩くことが前提にある。参加者3名がスマートフォンなどのGPS機能を搭載した端末を片手にそれぞれが思い描く"B"を意識して墨東エリアを歩いた。共通の意識でBokutoの"B"のイメージがある。使用するのはスマートフォンアプリのジオタグアプリケーション"EveryTrail"である(日本語非対応)。まち歩きを開始するその瞬間からアプリを起動し、所要所で撮影した面白いと思った場所や、"B"を描くうえでネックになるカールの部分などの写真もジオタグされていく。

過去のフィードはまち歩きの中で得られた気づきをもとに、京島校舎の黒板の地図上に感想をチョーク

で書き込むことで、「それぞれのスポット毎にどのような発見があり、どんな人と遭遇したのか」を共有した。今回はそれらの情報を同時に残していくことが可能で、ゴールした学生からまち歩きの結果をオンラインにアップロードすることで、出来上がった"B"の軌跡をシェアすることができる(twitterやFacebookなど)。それぞれが、ただる"B"の軌跡がどのようなかたちになるのかワクワクしながら集合場所を目指した。

今回の講義は「まちに絵を描く」ことなので、GPSが筆とパレットとなりMapが画用紙のかわりになっているが、いわば「まち」そのものが画用紙になり、そこを歩く私たちが筆になっているということに気付く。蟻の習性に、「ボールペンで紙の上に線を引くとその上を綺麗に歩く」というものがあるが、今日の講義はまさにそのような感覚に近かった。まち歩きの範囲は限定せず、かたどりの道をそれぞれが歩く楽しみが生まれた。アプリは写真を時系列に残すことが可能なので、追体験できることもこの講義のメリットだろう。

[以下、参加者の"B"の軌跡]

大崎: 歩いた距離: 2.2mile 歩いた時間: 1h  
[http://www.everytrail.com/view\\_trip.php?trip\\_id=1345138](http://www.everytrail.com/view_trip.php?trip_id=1345138)

岡部: 歩いた距離: 6.6mile 歩いた時間: 2h  
[http://www.everytrail.com/view\\_trip.php?trip\\_id=1345148](http://www.everytrail.com/view_trip.php?trip_id=1345148)

中島: 歩いた距離: 1.6mile 歩いた時間: 2h  
[http://www.everytrail.com/view\\_trip.php?trip\\_id=1345154](http://www.everytrail.com/view_trip.php?trip_id=1345154)

## さんぽの予習

2011年11月17日(木)

担当者

中島和成

11月19日に開催される墨東まち見世のさんぽ企画「こんな隙間から!?!、スカイツリー撮影さんぽ」の予習を行います。墨東の散歩初心者の「まち歩き」を支援する授業です。



長屋の間にそびえ立つように見えるスカイツリー、風情があってなかなか良いと思いませんか？墨東まち見世 2011 のさんぼ企画「こんな隙間から！？、スカイツリー撮影さんぼ」まで、明後日とせまった本日、当日行う下見を講義に組み込んでみました！

当日はただスカイツリーの撮影をするだけではなく、東向島や向島、京島に住む方々に、『スカイツリーが出来て、どういう想いを抱いているのか？』などのお話を聞いてみたいと思い、日頃お世話になっている方々に当日のご予定などをお聞きしに行きました。もちろん、『え、こんな隙間から、スカイツリー見えんの？』という場所のチェックも忘れずにチェックしてきました。

まずは、東向島、向島周辺から歩き始めました。お知り合いの方にお話を聞きに行くものの、急のお願いということもあり、なかなか19日のスケジュールが合う方はいらっしゃいませんでした。（ここまでみなさん予定が合わないものかと、紹介した自分に焦りが走り始めました。）

さて気を取り直して、次は京島に向かうことに、去年、まち見世 2010 のさんぼ企画で行った方のスカイツリー撮影スポットを巡りつつ、明後日のさんぼでオススメしたい場所を巡りながら歩きました。

歩きまわるうち、遂に、自分が一番自信を持って紹介できるスポットにやってきました。そう、京島南公園（通称、マンモス公園）。これは、かなり好評でした！！でもこの写真を撮影するのに、参加者



の方は少し苦の方は少し苦労していました。その「なぜか？」と、この光景を生で感じたい方は、是非京島南公園まで足を運んでみてはいかがでしょうか。

そしてようやく、キラキラ橋商店街に到着しました。そこでは、肌着の大和さん、京島校舎前にある果物屋のおかあさん、山田屋薬局の藤井さんともお話を聞かせて頂けることになりました。藤井さんに至っては、当日にスカイツリーの撮影スポットを案内していただけるそうです。

最後は、東向島珈琲店で本日の振り返りを行い、珈琲店のマスターにも当日お話を聞かせていただけるかお願いをしたところ快くOKしてくれました！

中島和成

## 首都圏ネットワークの取材が来た！

担当者

岡部大介



NHKの首都圏ネットワークが、なかぢの取組みを  
取り上げてくれることになりました。墨大講義では  
なく、墨東まち見世のさんぼ企画「こんなところか  
らスカイツリー」が発端です。が、記者さんが墨東  
大学の取組みにも興味をもって下さり、京島校舎で  
も撮影が行われることになりました。担当の記者さ  
ん曰く、「... 墨田は昭和の香りが色濃く残る町並み  
にもづくりの文化が生きているところに特に惹か  
れています」とのこと。またどうやら、ジャズや演  
劇など、区民が中心になったイベントが他の地域に  
比べて「並外れて」多いらしく、改めてまちのパワー  
を知ることになった。2012年5月のスカイツリー  
開業に向けて、墨東のまちや人の魅力を伝えていけ  
ないかということが、今回の撮影のきっかけになっ  
たとのこと。スカイツリーの開業の日にちが決まり、  
ツリーの入場券発売が開始されたことから、特集を  
組むことになったようです。

記者さんが着目されたのが、下町の象徴的な存在、  
「路地」。路地とスカイツリーが組み合わさったなか  
ぢ企画のまち見世さんぼツアーはうってつけだった  
様子。墨東大学のことを伝えたところ、さらにのっ  
てくれて、いつもいつもお世話になっているお向か  
いの果物屋さんや、藤井さんら、地元の方とのコミュ  
ニケーションを組み込む形にアレンジすることにな  
りました。

さて、取材／撮影当日に向けて、さんぼコースを巡  
りつつ、コミュニケーションをとっていく住民の  
方々にご挨拶しました。百花園、鳩の街、大和さん、  
町内会長さん、果物屋さん、藤井さんと巡り、京島  
校舎にたどり着きました。

もちろん、途中になかぢが設定（発見）したスカイ  
ツリー撮影スポットで写真を撮りながら。

そして撮影当日。ものすごい雨...。参加者7名で、  
東武曳舟駅から当初予定していたルートをかなり短  
縮して進む。雨に霞むスカイツリーを路地のすき間  
から探して行くツアー。現役墨大生と墨大卒業生が  
多数参加していたため、さながら同窓会のような  
パーティに。墨大京島校舎で、果物屋のお母さんと  
薬局の藤井さんにインタビューを実施。墨大京島校  
舎自慢の黒板も映してもらいました。

スカイツリーができて、地元の人々がどのような気  
持ちでいるか、ということのインタビューでした。  
このスカイツリー散歩ロケやインタビューを通して、  
あらためて認識することとなりました。

ものすごく楽しい取材／ロケでした(・∀・)人(・  
∀・)。なかぢの「下見力」も、さすがだし、ご協  
力いただいたまちの方々にも、あらためて感謝した  
いと思います。

そして、首都圏ネットワークの放送をみる。すごく  
ワクワクする構成とナレーションで、惹き込まれま  
した。構成の技か、墨大京島校舎での藤井さんのお  
話がすごく自然に染み入りました。今回NHKの方  
々と一緒にさせていただき、丁寧な仕事のされ方  
が心地よく、心打たれました。仕事の基礎を再確認  
させていただいたように思います。

岡部大介



# 大崎の卒業制作 -bokuto zoom-

2012年3月4日(日)

担当者

大崎 敬志朗







墨大生である大崎が、向島での自身活動と卒業研究と向き合うことを目的に卒業制作を行ないました。

『bokuto zoom』は、墨東エリアとの関わりを示す、ミクロとマクロの視点を往来する"遊び"です。例えば、この1年間は、墨東エリアに対するズームインとズームアウトを繰り返してきたように感じました。そしてもうひとつ。大学生として、【よそ者】として、アートイベントの事務局にボランティアとして関わること。働くということはどういうことなのか？草の根的にイベントを動かすとはどういうことなのか？このことについて考え続けた1年間でした。卒業論文としてまとめたものの、これについては、実はまだ自分の中で消化しきれていないままであります。

『bokuto zoom』を展示での対話を通して、少しでも解が見つければという願いから取り組みました。2010年3月、向島キャンプから墨東との関わりを持つようになった。研究室の先輩に誘われるかたちで墨大の卒制(『なかじの恋路』2011年)にも参加したが、この時の私は墨東のことが分からなかった。そして私自身も墨大の卒業制作に取り組むとは想像していなかった。横浜の研究室を飛び出し、



全く知らない別のまちにやってきているということ。この実感こそが墨東に対するファーストインプレッションであった。【よそ者】である私(大崎)にとって、墨田区向島を中心とする「墨東エリア」は馴染みのないまちでしかなかったのだ。しかし、地域密着アートイベントに事務局として1年間関わるとまちの風景も変わって見えてきた。都心から見ると巨大なタワーにしか見えないスカイツリー。ところが、東側の下まちから見ると銭湯の煙突のように、意外なほど生活にとけ込んで見える。苔むした路面、カラカラと音を立てる引き戸、人の気配、そうしたものの全てが、路地の魅力を引き立てている。スカイツリーの向こうにはそうした日本の失われつつある風景が待っている。zoom(ズーム)ということばからくるイメージはまちのスケール感を表すのにピッタリかも知れないが、単にまちの表面的な部分だけを表している訳ではない。制作に取り組むことでこの一年間を振り返る非常に良い機会となったが、私自身はまだまぢへのズームイン、ズームアウトが足りていないように感じた。『bokuto zoom』を眺めながら、まちを見る目線について、もう一度ゆっくり考えようと思う。

大崎 敬志朗

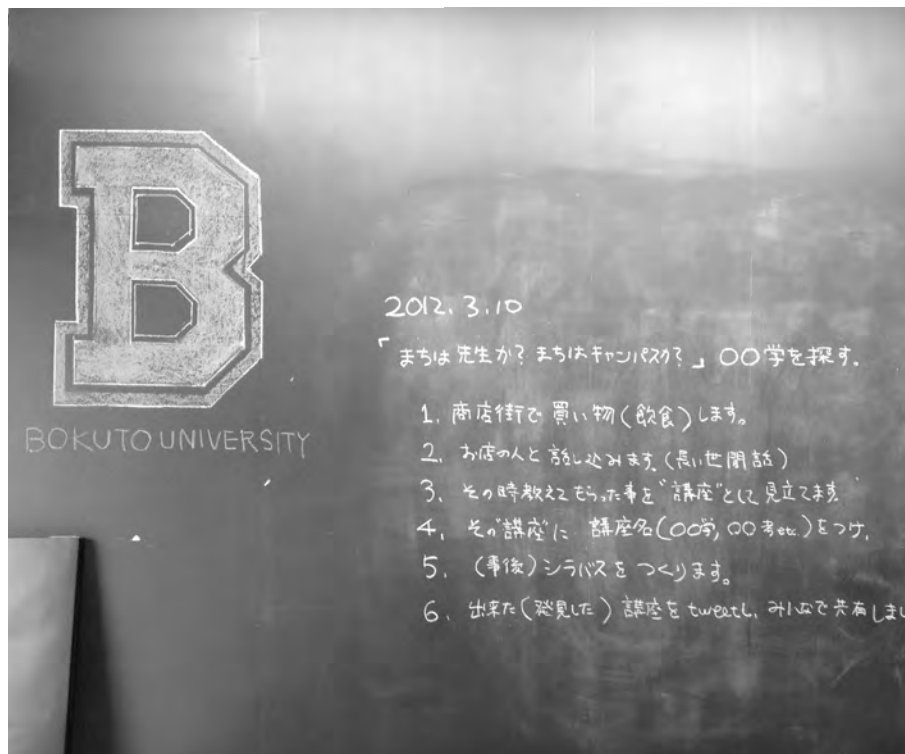
## まちは先生か？まちはキャンパスか？買い物しながら「〇〇学」を探す

日時：2012年3月10日（土）

担当者

木村健世

まちは私達に何を教えてくれるのでしょうか。本講座は一風変わった「講座を探し出す講座」です。墨東の商店街に繰り出し、買い物をしながら店主と話し込む過程で「売り手と買い手」という関係性が変容し、ときに店主は素晴らしい「先生」になってくれることがあります。この瞬間を逃さずに予想していなかったことを学ぶのが本講座の目的です。最終的には学んだ事柄に対して「〇〇学入門」や「△△講座」といった授業名を付け、事後シラバス（？）を作成し学生間で交換します。好奇心と探究心を全開にして一緒に墨東のまちに繰り出しましょう！



墨東大学を運営するにあたって常々考えていること「まちは先生なのか?」。このことをもう一度確認してみたくて、本講座を開設してみた。まちの人が発する言葉や、その姿から僕達は何をどのように学べるのか。また学べるのだとしたらそれは何学なのだろうか。割とストレートに墨東大学のコンセプトを再構成し、講座化した。例のごとくまちに繰り出し、まちの人と言葉を交わす。または観察する。そのシーン自体を一つの学（講座）としてとらえて、事後シラバスを作成する。一時間半のまち中でのリサーチの結果、6つの講座を得ることが出来た。以下はその講座名と事後シラバスである。

「老舗蕎麦屋における絶品アジフライ考」（五福家 / 店主）なぜアジフライは老舗蕎麦店の看板メニューに昇りつめたのか。ジャンルレスでありながら、こだわる箇所には徹底してこだわる絶妙なスタンスから次世代のプロフェッショナルリズムを学ぶ。

「沈黙のコミュニケーション論」（ハト屋パン店）商店街の中でも目を引く老舗のパン屋で、多くを語ろうとしない店主からコッペパンを買う。沈黙のコミュニケーションから想像してみよう。店主の表情から、店の看板から、コッペパンの味から、この店の魅力を読み解いていく。

「猫草と猫の生態に見る環境循環学」（山賀屋生花店 / 店員さん）季節によって生え変わる猫の毛と、その循環に呼応するように発芽、成長を繰り返す猫草の関係から、地球環境の不思議を学ぶ。猫を飼っている店員さんによる、神奈川産燕麦を用いたレクチャー。

「すきまのエコロジー学」（スターワン / 雑貨）店内に所狭しと並ぶ品々をよく見ると、鞆やサンダルに混じって雑誌の付録が並んでいる。売れ残り、あるいは不要品として廃棄されるものがここでは商品として置かれている。超すきま産業からエコロジーを学ぶ。

「現代お茶の間概論・下町編」（COFFEE NANA）近年、日本家屋の中で失われつつある「茶の間」を下町の喫茶店に見出す。そのなかでママと常連客の擬似家族的関係性から「茶の間」が持つ現代における役割を、ゆるい時間の流れの中で味わうコーヒーと共に体験的に学ぶ。

「駄洒落の演出学」（五福家 常連客のオジサン）そば屋に現れた常連客のテンポのよい会話から飛び出す駄洒落。その場の空気を一瞬にして打ち解けさせ、初めて来店した客も自然と会話に巻き込まれていく話術。下町のオジサンの駄洒落から場（空気）づくりの極意を学ぶ。

特別なハプニングも無く淡々とリサーチは進んでいったが、何気ないシーンも他愛の無い言葉も、〇〇学として捉えると興味深いものになった。そして予想外の発見があったとすれば、親しげなコミュニケーションだけでなく「沈黙」さえも無意味なものではなく、僕達に何かを伝えてくれる「授業」になったということだ。多様なものをどうとらえるか、何気ないものにどんな意味を見出すか。こちら側が何らかの方法をもって心の容積を広げれば、まちは様々な事柄を教え続けてくれる先生なのだとあらためて認識できた時間だった。 木村健世

# 墨大カレー考

日時：2012年3月17日（土）

担当者

木村亜維子 木村健世



世界中には様々なスタイルのカレーがある。インドカレー、タイカレー、ネパールカレー、おかんのカレー……カレー発祥の地、インドにおいても気候や風土によって地域ごとに様々なカレーがある。3000年程前にインドで生まれたカレーは、大航海時代から400年以上の時を越え、4万キロの旅を続け世界中へ広がっていった。それぞれの地域にあわせて柔軟に、多様に変化していったカレー。カレーについて考えることは地域を知ることと同義である。この講座では、墨東大学カレーについて思いを巡らせ、レシピ作成を行う。そして墨東大学京島校舎が位置する商店街で食材を調達し、墨大カレーを作り、試食する。はたしてこの日出来上がる墨大カレーは私達にどんなまちの姿を見せてくれるだろうか。

講義はまず、カレーの歴史と地域によってカレーがどのように違うのかなどのレクチャーから始まりました。カレーの具材やスープだけではなく、主食（カレーを何で食べるか）、食べ方（手なのかスプーンなのか）も地域によって違います。では墨東ではどうなのか？「墨東らしいカレー」の食材を求めてさっそく京島校舎があるキラキラ橋商店街ヘリサーチに。

一通り、商店街を歩き、決まった食材は「がんと、鶏モモ肉、タマネギ、小松菜、バナナ（お向かいの果物屋さんからの差し入れ）、昆布」主食は「パン耳」。ふとパン屋さんの店先で目に飛び込んできたパン耳はリーズナブルでしかもスプーンの変わりにもなります。続いて買い物。商店街をめぐる食材を集めます。鶏肉の分量はお肉やさんのおぼちゃんのアドバイスに耳を傾けながら決定。さっそく校舎に戻り、調理を開始します。ルーを使わず、限られた食材とカレー粉だけでカレーにたどり着くのは、思いのほか難しく、色も味も何かが足りない。ああでもないこうでもない話し合い、足りないものを買ってきて加える。校舎をのぞいた通りすがりの人にも味見をしてもらい、アドバイスをもらう。そうやって試行錯誤しつつ、墨大カレーは色も味も深まってきました。皆のアイデアを少しずつ少しずつプラスしながら墨大カレーは成長を続けます。そしていよいよ完成。「なかなか美味しい」「カレーっぼい」「不思議な深みがある」「なぜかふた口目がやたら美味しい」など、試食をすると様々な意見が飛び交います。そして新しいお客さんが、お隣のもつ焼き屋さんで飲んでいたオジサンが「何やってんだ」と私達のカレーの輪の中に入ってきてくれます。そして墨大

レーを試食。最初の味見からは想像もつかないくらい深い味。喜んでくれたオジサンからは、もつ焼き屋の生ビールをごちそうになりました。主食をパン耳にしたのもよかったかもしれません。大きな袋に詰められた大量のパン耳は通りすがりの人も遠慮なく手をのばしてくれます。そういうわけで「墨大カレー考」では、レシピの作成という当初のテーマから少々ずれつつも、あの日墨大に居合わせた人たちの試行錯誤の末、カレーがどんどん深みを増し、最終的には最高に美味しいカレーをつくる事が出来ました。

地域に開かれた場所でカレーを作ると、いろんな人を巻き込むことができる。一緒につくってくれる人、アドバイスをくれる人、一緒に食べてくれる人。予測不能だった通りすがりの人たちとのやりとりの中で、墨東のまちの側面を垣間見ることが出来ました。それは、よそ者もすんなり受け入れてくれる気さくさや、人との距離の近さにたまに感じる若干のめんどろさ、下町人情とってお店に入ると意外と冷たくされてちょっと傷つくこともあるし、かと思えば会ったばかりの人と膝叩くほど爆笑しあったりもできる。「いろいろ」です。一言では言い表せないその「いろいろ」に自分の中がかき回されて、いつも元気になって帰って来れるのです。いろんなものをかき回して完成（あるいは完成なんかない？）なんて人やまちはちょっとカレーに似ているかもしれない。そんなことを想わせてくれる墨東とカレーのセッションでした。

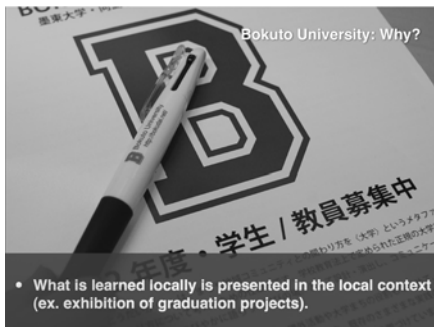
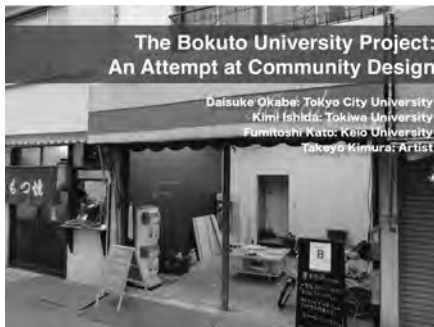
木村亜維子



研究発表

岡部大介・加藤文俊・木村健世  
 メタファとしての大学を組織する：  
 「墨東大学」という場のデザイン

学習と組織をめぐって：  
 越境論を考える，  
 2011年9月 認知科学学会  
 スライド資料







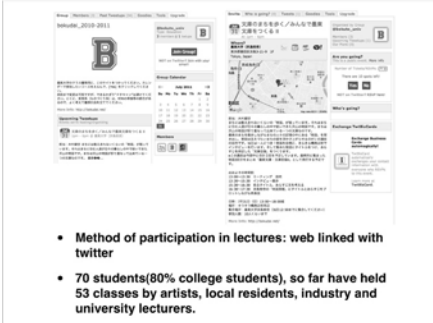
**Bokuto University: Why?**

- Designing "connection."
- Reconfirm the meaning of learning locally.



**Bokuto University Lecture:  
Straight seam seminar for grown-ups**

Sewing desperately away  
in a corner of a downtown street



- Method of participation in lectures: web linked with twitter
- 70 students(80% college students), so far have held 53 classes by artists, local residents, industry and university lecturers.

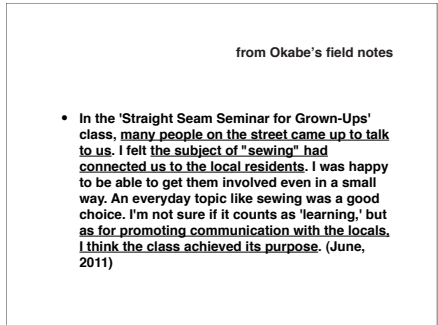


**Bokuto University Lecture:  
Straight seam seminar for grown-ups**

People who had come by to do their shopping came  
up to chat.



class example 01



from Okabe's field notes

- In the 'Straight Seam Seminar for Grown-Ups' class, many people on the street came up to talk to us. I felt the subject of "sewing" had connected us to the local residents. I was happy to be able to get them involved even in a small way. An everyday topic like sewing was a good choice. I'm not sure if it counts as 'learning,' but as for promoting communication with the locals, I think the class achieved its purpose. (June, 2011)



**Bokuto University Lecture:  
Straight seam seminar for grown-ups**  
(大人の直線縫い講座)

Daffy Duck's uniform:  
Bokuto University graduation regalia



class example 02



**Bokuto University Lecture:**  
 Pulling an all-nighter so you can take an afternoon nap  
 (昼寝をするための徹夜)



- A specialist who happened to come by taught the students the method of construction

from an interview with a Bokuto University student:

- A student who participated in the class "Pulling an All-Nighter So You Can Take An Afternoon Nap": "At first I thought, *what kind of class is this?*" So I wanted to shock the teacher (Kotaro Miyake, artist). Just staying up all night isn't that interesting, so I walked about 30km from my house to Bokuto, at night. By the time I got to the riverside place, I was so tired both physically and emotionally, but everyone talked about at Bokuto, so I was kind of happy." (November, 2010)

from a student field note:

- TOです。誰よりも面白い事ではなく、誰よりもくならない事をしたかった。全力で、僕は横浜から荒川まで歩いてみた。徹夜で、東京を横断してまちの違いや人々の文化の違いを知る事ができた。なんていうのは嘘だ。ただ真夜中の銀座をソニビの様に歩いたのは本当だ。荒川に着いた瞬間、授業開始のベルでなく、終了のベルがなった。人生の中で最短かつ最長の授業だった。

from Okabe's field notes:

- I talked to S (Contemporary Art Factory) about how Bokuto University was going. S asked how many local residents were participating in the classes. In the classes I've started up, there haven't been many local participants. I had been happy with bringing university students to Mukoujima. However, I felt strongly then that Bokuto University was expected to be an art project that involved local people.

a weak and fragile learning space

This kind of learning context where passers-by join in

the conversation is highly thought of by artists.

The classes in the Bokuto University art project

that have succeeded are the ones that involved local residents.

The discourses surrounding art.

Discourse supports knotworking.

Artifacts unite knotworking, connections and practices. Discourse has the same role.

Bokuto is a place where the discourses surrounding art run wild.

The discursive space that sustains knotworking, connection and practice is a community of practice built on that discourse.



class example 03

加藤文俊・岡部大介・木村健世  
シビックプライドを醸成する学習プロ  
グラムのデザイン：  
「墨東大学（ぼくとうだいがく）」の試み

地域活性学会 第3回大会  
2011年7月  
論文

# シビックプライドを醸成する学習プログラムのデザイン

## －「墨東大学（ぼくとうだいがく）」の試み－

○加藤文俊（慶應義塾大学）・岡部大介（東京都市大学）・木村健世（アーティスト）

Keyword：シビックプライド、地域資産、学習プログラム

### 【はじめに】

近年、「シブヤ大学」に代表されるように、「～大学」という呼称を用いて企画・運用される学習プログラムへの関心が高まっている。学校教育法で定められた正規の大学ではないが、生涯学習を実現するための仕組みとして、まちを「キャンパス」に見立てて、さまざまな講座が開設されている。こうした試みは、地域コミュニティにおいて学習プログラムを提供するばかりでなく、地域資産（local assets）の発見や評価のための「しかけ」として理解することができる。

こうした問題意識のもと、筆者らは2010年10月から2011年3月にかけて、墨東エリア（隅田川と荒川、そして東京スカイツリーのすぐ横を流れる北十間川によって囲まれた、墨田区の北半分を占める地域）を対象とする「墨東大学」プロジェクトを実施した（註1）。同プロジェクトは、〈大学〉というメタファーを介して地域に接近することによって、地域における人間関係のあり方やコミュニティへの帰属感、多様性・異文化の理解等の可視化を試みるものである。本論文では、とくにコミュニケーション・デザインという観点から「墨東大学」運営の実践過程を考察する。

### 【研究方法】

「墨東大学」プロジェクトは、地域資産を可視化する活動であり、半年間に提供された講座・実習の記録と筆者らの参与観察にもとづいて、この実践の定性的な評価を行っている。また、参加者（受講者）および関係者へのインタビュー調査を実施し、解釈・意味づけを強化する予定である。

### 【経過】

#### 1 学習プログラムの設計

およそ半年間にわたる「墨東大学」では、まち歩きやフィールドワーク、ものづくり等を課題とする46講座が開講され、63名が入学した。「墨東大学」は、多様な学習プログラムによって構成されている

が、典型的な講座を例に概観しよう。たとえば「編み編む編まれ編むとき編めば（担当：伊藤さち）」は、3回にわたって、京島校舎を会場に開講された（図1参照）。内容は、講座名の通り、参加者の各々が編み物を行うというシンプルなもので、以下のように特徴づけることができる。

①現場で素材を調達する 本ワークショップでは、墨東エリアで拾った素材（古雑誌、ビニールひもなど）を毛糸とともに直接「編み込む」形で、作品づくりが行われた。地域資産を発見するためのアプローチとして〈大学〉を考える際、現地調達の発想は欠かすことができない。素材を探すプロセスこそが、地域に暮らす人びとの想いに触れる機会となり、地域資産の可視化への第一歩になると考えられるからである。

他に開講されたものづくりの講座も、原則として材料（あるいはその一部）を現場で調達する方針で設計された。フィールドワーク型の演習は、墨東エリアの風景そのものが取り込まれ、議論の対象となった。

②地域の人びとと関わる 現場の素材を取り入れる際には、必然的に（地域の人びととの）コミュニケーションが発生する。たとえば編み物の場合、京島の商店街という場所との相性がよく、ごく自然なかたちで道行く人びとの参加を促すことができた。受講者は、あらかじめ登録を行った学生であったが、オープンな環境で開講されていたため、つねに地域に暮らす人びととのコミュニケーションを誘発しえた。講座としての面白さや満足感は、通りすがりの買い物客や近隣の店主等と即興的に関わりを持つことによって高められたと言える。

さまざまな課題は残ったものの、基本方針としては、「（墨東大学）の学生としてあらかじめ登録された）正規の学生のみならず、つねに「飛び入り」の参加を促すような「しかけ」についても模索した。

③成果をまちに還す 「墨東大学」における講座は、

一方向的な学習プログラムではなく、学びの成果を地域に還し、地域からのフィードバックを得られるように心がけた。講座をつうじて生まれた編み物の作品をはじめ、「墨東大学」の講座の成果は、「卒業制作展」で展示し、地域に暮らす人びとからの評価を得られるよう設計した。(註2)

今回は試行錯誤のなかで運用したので、ネットワーク上で提供されている情報が豊富だったのくらべると、現場での告知などは、やや足りなかったかもしれません。プロジェクトの後半は、「いまやっています」と書いた、小さな看板を京島校舎の外に出して、道行く人びとも呼びかけるようにした。



図1：墨東大学編み編む編まれ編むとき編めば(伊藤さち)

## 2 コミュニケーション・デザインの実際

本プロジェクトにおいては、(大学)であることを演出するためのコミュニケーション・デザインとして、さまざまな道具立てを整備した。今回は、アメリカのアイビーリーグ校をイメージしながら、デザインがすすめられた。

①スクールカラー/ロゴ 〈大学〉というメタファーで、全体を考えたとき、まず決めておきたかったのはスクールカラーとロゴである。赤・エンジ色を基調にイメージし、わかりやすさ、覚えやすさということから、シンプルに Bokuto University の「B」をロゴにした。

②ウェブサイト 墨東大学のオフィシャルウェブも、比較的早い段階で立ち上げた。ネットワークを介して、すべてを完結させることは難しいが、スケジュールや日常的な告知、活動記録(アーカイブ)のことを考えて、さまざまなデータをネットワーク上に蓄積し、共有できるように心がけた。たとえば、臨

機応変な運用を実現するために、講義・演習への参加表明は、「twtvite」という Twitter と連携したウェブサービスを活用した。(註3)

また、講義・演習の開講後はできるだけ早く講義録(ブログ記事)や記録写真を整理し、プロジェクトの進捗自体を公開しながら運用した。

③グッズ また、さまざまなロゴ入りグッズをつくる計画を立てた。学生、教員、スタッフが共通のグッズを持ち歩き、その「アイコン」を介して連帯感・一体感を醸成し、「墨東大学」という学習コミュニティへの帰属意識を高めることを目指した。

一連のグッズは、(予算や手続きの便宜上)大量につくって配布できるものではないため、最初から希少性の高いモノとして流通する。ボールペンやタンブラーは、もちろん実用的であるが、受講者・参画者の「話の種」になる。一連の墨大グッズがきっかけになって、墨東エリアのこと、暮らす人びとについてのコミュニケーションが発生した。その意味でも、ロゴ入りグッズは、ささやかに見えて、重要な役割を果たしたと考えられる。

また、同エリアで開催されていたイベント「墨東まち見世 2010」のかわら版や、チラシなどの媒体も、墨東地域や「墨東大学」プロジェクトで起きている事柄を共有し、記録として蓄積していくのに役立った。

## 3 「墨東プライド」の醸成

「墨東大学」は、架空の〈大学〉であるが、それでもリアルな存在である。つまり、大がかりな「ごっこ遊び」でありながら、真剣に「遊べる」という点が重要であった。わかりやすく、さらに動機づけにつながる「しかけ」こそが、人びとのコミュニケーションを促進すると考えられる。その観点から、「墨東大学」では、学生、教員・スタッフの一体感を生み出すにはどうしたらよいかについて検討し、上述のような学習プログラムの設計と、ロゴ等によるコミュニケーション・デザインによって、〈大学〉という文脈づくりを試みた。

近年、さまざまな形で、対外的なイメージづくりや「集客」をねらう場づくりの試みがあるが、〈大学〉というメタファーを活用することで、中長期的に「シビックプライド」の醸成に寄与することを目指した。「シビックプライド」は、それ自体がデザインされるものではなく、その醸成につながるコミュニケー

ジョンこそがデザインされるべき対象となる。伊藤らは、『シビックプライド』のなかで、さまざまなコミュニケーション戦略の可能性について整理を試みている。図2のように、「情報」「空間」「アクティビティ」「シンボル」という4つの領域で、デザインされるべき対象を方向づけることができる。さまざまなコミュニケーション・ポイントは、地域との関わりを生み出すきっかけとなる。

「墨東大学」プロジェクトにおいては、「京島校舎」という名称で運用した空き店舗(墨田区京島3丁目)が、いわば「都市情報センター」に位置づけられる拠点として機能したと言える。京島校舎を起点に、「アクティビティ」としてワークショップやイベントのデザインが行われ、「情報」や「シンボル」については、上述のとおり、ウェブや印刷物をはじめ、ロゴ、VI、グッズなどを制作して情報発信を試みた。

ここで、注意したいのは「シビック」も「プライド」も、東京都の下町の風情・風景を語るには、やや馴染みにくい概念であるという点である。語感もふくめ、適切な表現を模索する必要はあるが、たとえば墨東エリアであれば、昔ながらの気質で人と人との距離感を調整し、地元への愛着心を導ぶ「墨東プライド」ともいうべき気質が共有されていることが、徐々に感じられるようになった。まちを〈大学〉に見立てた「しかけ」は、こうした意識を可視化し、よりわかりやすい形で整理していくための装置として理解することができるだろう。

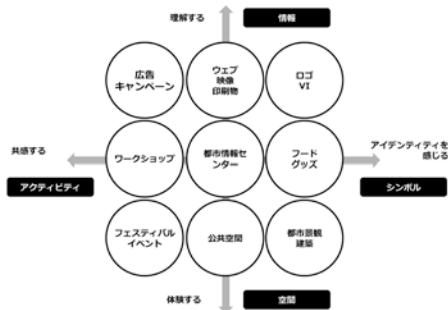


図2 コミュニケーション・ポイント・マップ (伊藤ほか, 2008より作成)

### 【ディスカッション】

「墨東大学」プロジェクトは、実験的な試みであ

ったが、地域を理解するための「方法の探究」としての側面から、以下のような知見を得ることができた。

### 1 ビジュアル・アイデンティティの重要性

仮想的な〈大学〉ではあるものの、ロゴデザインやテーマカラー、グッズの制作・配付等によるコミュニケーション・デザインを通じて、参加者の帰属意識を高め、一体感を生み出すことができた。

重要な点は、こうしたビジュアル(ロゴなど)が、ある程度受容され、普及がすすむと、参加者どうしのいわば「共通言語」として機能し始めるという点である。たとえば2011年3月、「卒業制作展」や「卒業式」を前に、京島校舎の黒板壁に「B」が描かれた。大きな赤い「B」は、このプロジェクトに関わった全員をつなぎ、「墨大プライド」を育む、大切な記号となった。

また、象徴的だったのは、プロジェクトの最終フェーズで実施した「卒業式」の際に、参加メンバーの一人が「B」の形をしたクッキーを焼いて持参したというエピソードである。いささかナイーブな観察結果ではあるが、この時点で、「B」というロゴが〈大学〉という仕組みで提供されている文脈を越えて、参画者にとって意味のある「アイコン」になったと言えるだろう。コミュニケーション・デザインという観点からは、コミュニケーション・ポイントのすべてを準備・提供するのではなく、自律的な複製・改良を促すような「共通言語」を提供することが、参加意識のみならず創造力をも高めると考えられる。

### 2 日常的な記録の蓄積

本プロジェクトを運用していたおよそ半年間は、意識的に活動記録を残す方法についても検討をすすめた。その主たる理由は、プロセスを公開し、プロジェクト自体の認知度を高めるためのプロモーションという目的があった。とくにウェブを介した情報提供は、「鮮度」の高い情報を共有するために役だった。

また、最終的には200ページの報告書を編集したが、その少なからぬページは講義・演習を担当した教員が、そのつど書いたブログ記事を元に再構成した。日常的な記録の蓄積は、プロセスの公開のみならず、〈その時・その場〉の体験を鮮明に残すことができる。「方法の探究」という観点からは、講義録や

写真のアーカイブは、いわばフィールドノートとして活用できる、定性的データとして理解することができる。

### 3 シークエンスをデザインする

〈大学〉というメタファーで、学習環境のデザインをすすめる際には、入学手続きにはじまり、講義・実習、評価、卒業にいたるまでの一連の流れをデザインすることになる。それは、進捗管理という意味でのプロジェクト・マネジメントのみならず、参加意欲を高め、継続させるための「しかけ」として構想する必要がある。

たとえば、「墨東大学」では入学が決まると、学生証を発行し、「らしさ」を感じてもらうための演出として、墨東大学の封筒で郵送するようにした。また、メンバーシップの証として発行する「学生証」は、スタンプカードのような機能を持たせて運用した。〈大学〉での学修プロセスを「学生証」に記録することで、進捗を記録し、さらに、所定の期間中に何度か地域に足をはこぶための動機づけにもつながるようデザインした。

コミュニケーションの媒体、チャネル（情報伝達の経路）、タイミングや頻度など、情報提供のあり方を上手くチューニングすることが、プロジェクト自体の活性化において重要であろう。

#### 【おわりに】

半年間の「墨東大学」の実践によって、地域特性に応じたプログラムの設計や、告知・広報のあり方について検討することができた。今後は、学習プログラムとしての完成度を高めるとともに、持続可能性や他の地域における適用可能性について実証的研究をすすめていきたい。

言うまでもなく、〈大学〉はさまざまな要素が関与して構成されている仕組みである。地域に根づき、「シビックプライド」を醸成に結びつけるためには、長期に渡って、これらの要素が安定した関係を結ぶ必要があるだろう。「墨東大学」を成り立たせていた諸要素について考えるとき、すべてを「モノ」に集約できるわけではない。コミュニケーション・デザインは、「モノ」と「コト」が、適切に組み合わせられた、諸要素の関係性の「総体」として考えていく視座が求められる。

#### 【註】

註1 「墨東大学」は、2010年9月～2011年3月

にかけて、下記の課題で実施された調査研究（「大学まち」のデザインをつうじた地域力の可視化に関する研究：「墨東大学」の実践と評価）の一環として企画・運用したものである。主催：東京都・東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）・慶應義塾大学・東京都市大学\*\*

\* NPO法人向島学会×東京アートポイント計画  
「墨東まち見世2010」参加企画

\*\*「学生とアーティストによるアート交流プログラム」参加企画：「学生とアーティストによるアート交流プログラム」とは、学生が地域や社会の中でアーティストと交流・協働しながら、実験的・先進的なアートプロジェクトを実施する機会を提供することを目的として、東京都と東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）が、大学等と連携して実施する事業である。東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指す「東京アートポイント計画」の一環として実施されている。活動内容は、冊子にまとめられており、下記サイトより全文をダウンロードすることができる。<http://bokudai.net/>

註2 「卒業制作展」は、2011年3月9日（水）～13日（日）の予定で開催されたが、11日に発生した東北地方太平洋沖地震のため、11日以降は中止となった。

註3 twtvite <http://twtvite.com/>

#### 【引用・参考文献】

- ・ bockt（加藤文俊・岡部大介・木村健世）（2011）『墨東大学の挑戦』（「大学まち」のデザインをつうじた地域力の可視化に関する研究：「墨東大学」の実践と評価・報告書）
- ・ 伊藤香織・紫牟田伸子（監修）（2008）『シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする』宣伝会議
- ・ 加藤文俊（2011）メタファーとしての〈大学〉：地域資産を評価するコミュニケーションのデザイン『地域活性研究』第2号，pp. 17-24.
- ・ Kretzmann, J. and McKnight, J.（1993）*Building communities from the inside out: A path toward finding and mobilizing a community's assets.* Skokie: ACTA Publications.





## まちのおみやげプロジェクト

まちでの経験は、どのように記憶されるのか。そして、まちへの親近感や愛着は、どのように育まれるのか。最近は、そんなことを想い浮かべながら、まちを歩いている。やはり、あの日から変わったのかもしれない。今まで以上に、まちの風景を考える。

「まちのおみやげ」プロジェクトは、もともと「墨東大学」の講座に組み込んで実施したいと考えていたが、調整がうまく行かず、加藤研究室のフィールドワーク課題としてすすめることになった。2011年度秋学期は、まちや地域の人びととの関わり方について考えるべく、「おみやげ・グッズをつくる」というテーマのもと、5つのグループに分かれて墨田区京島界隈のフィールドワークをおこなった。以下では『まちのおみやげ』という冊子の記事を、一部修正して再掲載している。

## まちのおみやげプロジェクト

「リマインダー (reminder)」としてのおみやげ  
ほくたちの身の回りには、写真や日記、手紙などの  
さまざまな記録があって、じぶんの経験を思い出す  
のに役立つ。最近では、動画や音声なども日常生活  
のなかで記録され、蓄積されるようになった。また、  
おみやげのように、旅先で買ったり、もらったりす  
るモノも少なくない。過去を思い出す手がかりとな  
るモノは、たくさんあるのだ。みやげものの研究を  
したヴェバリー・ゴードンは、おみやげや記念品を  
「リマインダー」であると性格づけた。つまりそれは、  
旅先での時間と空間が凍結されている〈思い出喚起  
物〉である。実際に、ふと目にするだけで、モノに  
閉じ込められていた、滞在中の出来事や風景への想  
いがふたたび温かみを帯びて、鮮明によみがえっ  
てくることがある。まちに出かけて、「何か」を持ち帰  
っておけば、いずれ、追体験をするのに役立つはずだ。

「トークン (token)」としてのグッズ  
おみやげは、思い出を凝縮して持ち帰るためのモノ  
だが、じつは、出かける前にも、ほくたちはさまざ  
まなモノと関わりをもつ。本当は、あまり事前に準  
備をせずに、現場での出会いを大切にしたいほうが  
いいかもしれない。だが、支度をしながら、旅先  
での出来事にあれこれと想いを馳せるのも楽しい。ほ  
くたちは、まちの雰囲気に合わせて服装をえらんだ  
り、イベント用にグッズを揃えたりする。まちへの  
親近感や愛着は、「何か」を持ち帰るだけではなく、  
「何か」を準備し携えることにも表れるはずだ。だ  
から、いろいろなグッズについても考えてみたほう

がいい。グッズは、ほくたちを現場へと誘う「トー  
クン」だと考えることができる。それは、まちへ入  
るための〈通行证〉のようなものだ。特別なモノが  
あることで、まちを身近に感じることができる。ま  
た、それを携行していることで、違和感なくまちに  
とけ込むことができる。グッズも、まちに近づくた  
めの装備になる。

まちや風景を語るきっかけ

「リマインダー」も「トークン」も、一人ひとり  
の内面にだけ収められているわけではない。個人的  
な感情が充たされたおみやげは、そっとしまってお  
いたほうがいいのかもわからない。とっておきのグッ  
ズは、密やかに眺めたい。だが、重要なのは「リマ  
インダー」も「トークン」も、まちでの経験や旅へ  
の想いを、誰かと語るきっかけになるという点だ。  
引き出された記憶を、誰かと共有し語ることによ  
って、息づく過去があるはずだ。出発前の、はやる気  
持ちは、抑えきれずに誰かに伝えたいくなるものだ。

このプロジェクトでは、フィールドワークをつら  
じて、まちのなかで、(有形・無形の) 素材をさがし、  
それをおみやげやグッズとして仕立てることを試み  
た。墨田区京島という個性的なエリアを対象として  
いるが、おなじ発想で向き合えば、他のさまざまな  
文脈でも、おみやげやグッズによって、コミュニケー  
ションを誘発できるのではないかと考えている。ま  
ずは、その入口の扉を叩いたということだ。このプ  
ロジェクトで生まれたアイデアのなかには、さらに  
磨きをかければ、実際にまちで広がりを持ちうるも

のもふくまれているだろう。未来をつかってゆくためには、過去を復原する想像力が必要だ。あたらしいビジョンにワクワクできるような、シンボリックなモノも欠かせない。さまざまな「リマインダー」や「トークン」を介して、誰かと向き合い、語ること。そのきっかけづくりについて、丁寧に考えることが、ぼくたちの仕事なのだ。

加藤文俊

※この「まちのおみやげ」の成果は、2012年2月3日～5日にかけて、「フィールドワーク展Ⅷ」（ギャラリー やさしい予感）で展示した。詳細は、以下のサイトを参照のこと。  
<http://vanotica.net/omiyage/>

# 京島クッキー



## 紹介カード

京島でおあめのお店3店の  
紹介カードと、その理由などを書いた  
カードの4枚セット。

## クッキー

「ボクウ」をモチーフにした手作りのクッキー。  
形は、「墨東」→「ボクウ」→「ボク」で  
スティック状にし、味付けは、  
「墨田区」の「墨」をイメージした黒ごま味にした。



## クッキー

今回私たちは、「京島」を訪れたことのない人へのおみやげを作ろうと考えた。言わばおみやげというよりは、訪れるきっかけとなるプレゼントである。私たちは、プレゼントを作るのならば、老若男女誰にでも手に取りやすく、喜んでもらえるものが良いと考えた。普段私たちが貰って嬉しいおみやげは何かと考えてみたところ、お菓子が良いのではないかという話になった。

そこで、私たちはこのまちに馴染みのあるお菓子屋さんと共に新しいメニューを作ろうと考えた。二年ほど前にオープンした、パンと洋菓子を販売するKENJIというお店を尋ねた。冬はクリスマスやバレンタインなどがあり、お店がもっとも忙しくなる時期なので、材料や場所の提供は出来ないが、お菓子作りについてアドバイスを頂けるということになった。本当にありがたい話である。お菓子作り素人の私たちにとって、プロの意見はとても貴重である。

何はともあれ、私たちは実際にお菓子を作ってみることにした。しかし、お菓子と言っても形も味も様々な種類がある。そこで、あらためて京島について思い返してみると、立ち話をするお店のお向かいさん、店頭で並べられる和菓子や揚げ物を選ぶ人々など、顔と顔が向かい合う、そこに暮らす人々の笑顔が浮かんできた。私たちは、人々がふと笑顔になれるようなお菓子を作ろうと考えた。

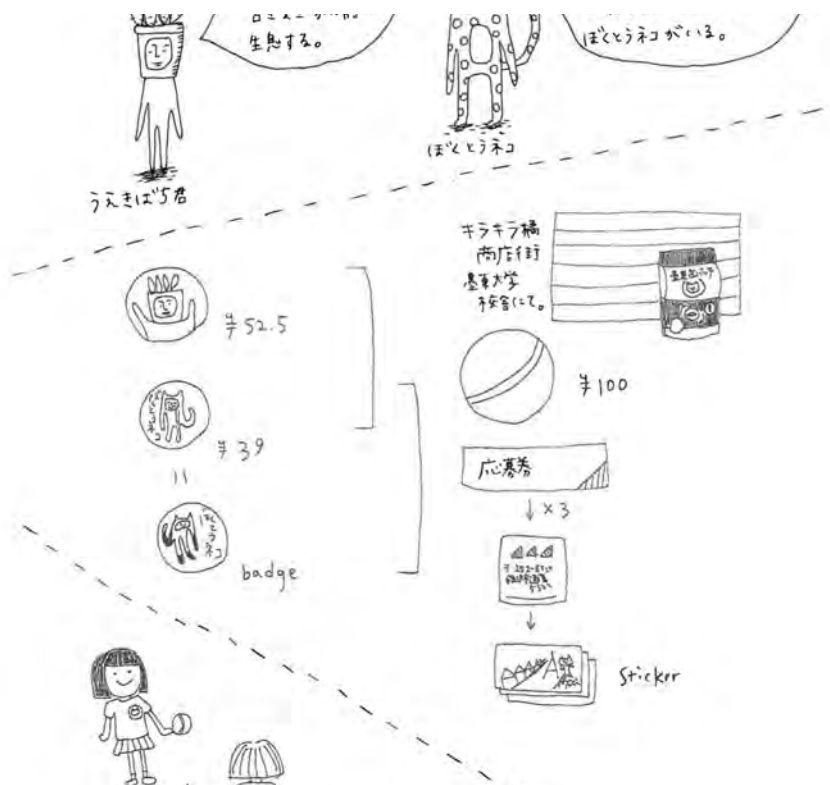
お菓子の形は、墨東→ボクトウ→木刀でスティック型にし、味は、墨田区の「墨」に見立てた黒ゴマを練り込んだものである。単にダジャレと言えばそ

れまでだが、ふと笑顔になれるこのまちに受けた印象を表現することで、「京島クッキー」は完成した。また、キラキラ橘商店街に並ぶお店の紹介カードを付録にと考えた。このクッキーをきっかけに京島へ出かけて欲しいという想いからである。

おみやげというものは、まちと人の結びつきを強く印象づけ、人と人との関係さえも作る、一種のコミュニケーションとしての役割を果たしてくれる。また、親しみを確認する大切なメディアとしての役割も持っているのである。この役割は、まち全体としても大きな意味を持つようになっていこう。

また、おみやげにほかの誰かとの会話の材料となるような物語性、そしてきっかけを加えることによって、まちとの距離も自然と近くなる。実際私たちは、おみやげについて考え始めてから、京島に対するイメージや想いは大きく変わっていった。いつも賑やかなキラキラ橘商店街、のんびりと時間が流れる喫茶店。そんな毎日が当たり前過ぎていく京島の町並みは、すでに私たちの心の中に刻まれている。

関取花・廣野吉隆・吉田あんな



## カンパッチ

今回おみやげ・グッズを作るにあたり、初めて京島の辺りを歩いた。曳舟駅から墨東大学校舎を目指す。東京というと都心のイメージが強く、人は多いわりに「人が住んでいる」印象はあまりない。しかしこの辺りには、その「生活感」が溢れているように感じられた。どこか懐かしさがあり、初めて訪れた土地にも関わらず、地元に戻ってきたようなそんな印象を受けた。

夕方のまちを歩くと、銭湯の桶を持ったパジャマ姿のおじいさんや、自転車で颯爽と走り抜けるおばさん、グリコをしながら帰る親子、会社帰りのサラリーマンとすれ違う。商店街の賑わいや、住宅地で急に漂ってくる夕飯のにおいも、このまちを「地元っぽい」と感じた理由なのかもしれない。

休日のまちに行くと、商店街のお店はほとんど閉まっていてひっそりとしている。しかし細い道を抜けると、どこからか子どもたちの元気な声が聞こえてくる。休日は京島エリアの公園が人気ようだ。自転車で元気に通り抜ける子どもや、昼食のために子どもを迎えにくる親。そこには休日ならではの雰囲気を感じられた。

そしてやはり、東京スカイツリーの存在も忘れてはならない。グランドオープンまであと数ヶ月。634メートルという高さは、京島を歩いているとどこからでもよく見える。初めて訪れたときには思わず写真を撮ってしまったが、今となってはもう撮らない。それと同じように、ここに住む人たちにとってそれはもう日常の風景の一部なのだろう。これらの雰囲気をおみやげに取り入れられたら、と思う。

京島関連の情報を提供するというサービスの在り方も考えた。しかし、それよりもカタチとして残る、手にとってもらえるような商品を作りたい。そう思い、たどり着いたのががちゃがちゃであった。

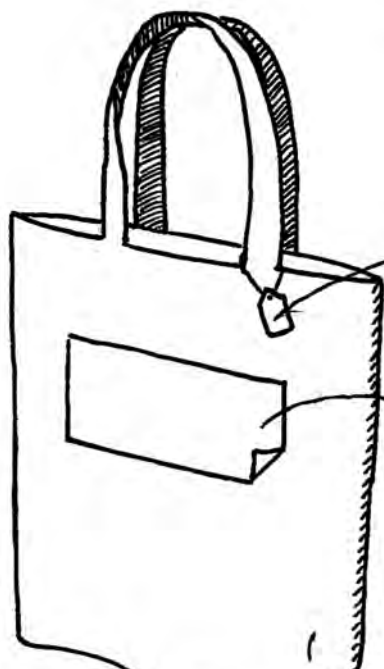
がちゃがちゃの魅力は、子どもでも手が届きやすい価格であること、自分でがちゃがちゃを回すことが出来る楽しさ、そしてカプセルの中に何が入っているのか分からないドキドキ感にある。墨東大学の校舎にはがちゃがちゃの機械があったため、これを利用して子ども向けのおみやげを作ることにした。

対象を子どもにしたからには、子どもたちを惹き付ける、思わず回してしまいたくなるような魅力的な中身を考えなければならない。100円の小さなカプセルに収まるもので、子どもたちの心を掴むもの。それを知るために、実際に子どもたちに話を聞いてみた。いくつかの情報と条件を考慮し、わたしたちは京島の周辺でよく見かける猫をモチーフにキャラクターを考えた。そしてその缶バッジを作ることにした。また、より楽しさを増やすために、ひとつのがちゃがちゃには2個の缶バッジと応募券を入れ、応募券を三枚集めると、墨東ステッカーをプレゼントすることにした。このおまけは、子どもたちの好奇心を煽るためでもあり、がちゃがちゃで遊んでくれる子どもたちとわたしたちが、ハガキを介してもう一度コミュニケーションを取るための手段にもなってくれるかもしれない。

笹野結衣・新飼麻友・高木静香・和田勇人



bokuto + ecobag



タグ  
モーターにさせていただ  
いたお店を紹介。

転写シート  
私たちの目線で切り  
取ったお店を転写。





## エコバック

本来、おみやげは観光地を訪れた際に求めることが多いのではないだろうか。それは友人に報告したり、旅のエピソードを共有したりするためのメディアであったりする。おみやげを誰かにあげることで、終わったはずの旅がもう一度自分の中によみがえるのだ。そして、手にしたひともおみやげを介して出向いたことのない土地に想いを馳せる。それを踏まえて、墨東のおみやげを考える。私たちが感じた魅力を伝えられるモノをつくりたいと考えた。商店街をあるいていて気になったのは、購入したお惣菜などの持ち帰り方だ。商店街には多くの店が並んでおり、人々はそれぞれの店で商品を買いきることになるはずである。そのたびに、たくさんのビニール袋を持つのは面倒だろう。そこで、買ったものを入れておくバッグの必要性を感じた。エコバッグなら、生活のなかの様々なシーンで使え、まちを意識する機会も多くなる。これなら墨東を訪れる人だけでなく、墨東で暮らしている人にも使ってもらえるだろう。

エコバッグを制作する上で最も肝心なのは、デザインだ。DEAN&DELUCAはアメリカ合衆国のニューヨーク州に本拠を置く食料品チェーン店だが、ロゴ入りのバッグが女性を中心に人気だ。やはり、使ってもらうためには使ってもらえるだけの見た目の良さ・おもしろさが必要だと感じる。

素材となるものを探すため、墨東をあるく。最も印象に残るのは、やはり商店街をはじめとした小さな店の数々だ。そのひとつひとつに看板がある。注意して見ると、店の名前が入っていないものも多い。年月を経て、プリントが色あせてしまったも

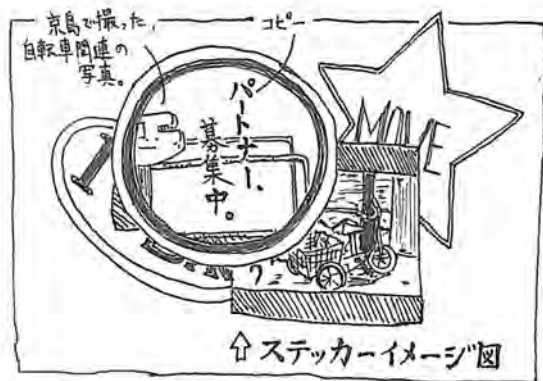
のもある。それらは統一感がないように見えるが、ネオンの看板にはないぬもりを感じ取ることができる。そこで、昔ながらの商店街の象徴である看板を中心とした風景を切り取り、バッグに取り入れたいと考えた。

どれだけ魅力的な商品をつくることができたとしても、私たちだけで販売できる量には限界がある。そこで、よりたくさんの人に触れてもらうため、エコバッグのモチーフになるお店に卸して販売してもらうことを提案した。

使用者やシチュエーションを問わず使え、私たちの生活に密着したものであるエコバッグは、ときに時間的・空間的広がりも見せるだろう。バッグを介して墨東を知ること、これまでつながりのなかった人々が訪れるかもしれないし、バッグが2012年の墨東の姿として記録され、後世にのこされていくかもしれない。

墨東には訪れた者にしかわからない魅力がたくさんあり、訪れた「よそ者」を受け入れる包容力もある。私たちは、そんなどこにでもありそうで、ここにしかない、このまちをよりたくさんの方に勧めたい。制作したエコバッグを手にしたひとが私たちと同じ気持ちをもち、墨東に出かけたいくなるようなものであれば幸いである。

大川朝子・丸本智也・三島麻里江



## ステッカー

私たちが京島のおみやげを作るにあたって、どうすればおみやげという形でまちに還すことが出来るのだろうかと考えてみた。何度もフィールドワークに出かけてみて、観察していった結果、私たちのグループは「よそ者の視点から作った京島のおみやげによって、京島の人々の意識をもっと地元に向けてもらいたい。」と考えた。京島の景色は美しい、その景色の中で自転車は大きな役割をはたしている。私たちにとって京島は、生活になくってはならない自転車が風景の一部と化している。自転車が無造作に置かれている景色は時に汚いものに見えてしまうが、置き方によっては風情があったり、むしろ整然としているところも垣間見える。自転車の置き方や使われ方が京島の人の生活を映し出していると私たちは考えるようになった。そこで、自転車にまつわるグッズを私たちのお土産にしようという結論に至った。

自転車のアクセサリーには様々な種類のものがあるし、選ぶのには苦労した。ましてや、自転車のアクセサリーは使う人に寄り添えるものでないとならない。実際に使えるかどうか。伝えたいことを、どうやって伝えたらよいか。いろいろと考え、私達はステッカーを作ることに決定した。ステッカーは必然的に目にとまる所に貼るので、目立ちやすい。それに、自転車に関わらずさまざまところに貼る事ができるので、汎用性もある。ステッカーのデザインにも工夫をした。京島に出かけて自転車や風景の写真を撮り、少しユーモアのあるキャッチコピーを載せることで、今まで慣れ過ぎていてあまり新鮮味の

なくなっていた街を再発見できるようなデザインにした。実際に作ってみたステッカーを例に挙げて、駐輪場のタイヤをはめ込むスタンドの写真に、「パートナー募集中」のキャッチフレーズを載せたものがある。勿論、ここで言うパートナーとは自転車のことである。私たちは無造作に置かれた自転車が乱雑に見えてしまったが、ただ路上駐輪禁止を呼び掛けるだけのフレーズだと、少し固い印象を受ける。しかし、先ほどのステッカーのように、ユーモアを織り交ぜることで地元の人でも気付かなかったような環境に意識が行くようになるのではないだろうか。

どこか知らないまちを訪れる際、よほど有名なものでもない限り、おみやげ自体を目的にしてまちを訪れる人は少ないだろう。だが、そのまちで買ったおみやげには一人一人に違った物語があるし、時間が経った時にそれを思い起こさせる「リマインダー」の役割がある。今回私たちが作ったステッカーは、あくまで京島の魅力という「主役」を照らして意味を成す、いわば「スポットライト」のような存在でありたいと思っている。

スカイツリーも美しいけれど、それを見守り続ける下まち「京島」も美しい。人とまちと自転車、それぞれが交わって描くストーリーを私たちが作ったステッカーで彩っていきたい。

川村恵理・長富将成・蓬生まり



## イケア

私たちがまず初めに考えたのは、買い物で使えるバッグの製作だった。そして、そのバッグをたくさんの人に使ってもらうことで、商店街の景色を華やかにしていこうと考えた。何か身につけるものを提供することで、景色に変化を与えている場所はないだろうか。そう考えた私たちは、IKEA におけるバッグの使われ方に注目をした。IKEA とはスウェーデン発祥の家具屋で、近年絶大な人気を誇っている。店内には専用のショッピングバッグがあり、それは IKEA の代名詞にもなっている。その IKEA へ、私たちは実際に足を運ぶことにした。

IKEA には、多くの工夫がちりばめられていた。私たちは当初の目的だったバッグだけに限らず、様々な買い物のシステムに目を奪われた。まずはバッグを観察した。大きくて軽いそのバッグは、とてもシンプルで、気軽に商品を入れることができる。そして、たくさんの買い物客が、店内で皆同じバッグを持っている光景は圧巻だった。これらの特徴があることで、IKEA 特有の買い物のしやすさが生まれている。そう考えた私たちは、これをそのままキラキラ橋商店街に生かすことができないか、と考えるようになった。

ここから、「キラキラ橋商店街の IKEA 化」というアイデアが生まれた。私たちの目標は、景色を変えることと、買い物を楽にすることである。せっかく楽な買い物の完成形があるのだから、そっくり真似をしてみればいいのではないか、そう考えたのだ。私たちは、その特徴に倣ったグッズを作ることに決めた。

まず1つは、「KILA バッグ」だ。IKEA で見られたあのバッグの手提げ部分の文字を、IKEA から KILA に替えて作成した。これを使えば、買ったものをひとつにまとめて持ち、楽に買い物をすることができる。そして、商店街中に広がるこの鮮やかな青いバッグが、瞬間に景色を華やかにしてくれるだろうと考えた。次に、買い物チェックリストである。商店街の地図を作り、それぞれの店には番号をつけた。そして、自由に書き込みが出来るようにした。行く必要がある店に印をつけることで、買い忘れの防止や、スムーズな買い物にも繋げられる。最後に、ディスプレイのリーフレットだ。商店街で買えるものを組み合わせて、食卓の完成像をつくることで、買い物のイメージがしやすくなる。の3つのグッズを使うことで、商店街を IKEA 化し、景色を変えること・買い物を楽にすることを実現することができた。それまではスーパーやコンビニで生活用品を買うのが普通だった私たちが、めったに行く機会のなかった商店街に何度も通った。その度に、会う人会う人が声をかけてくれた。美味しいお店や、惣菜屋の焼き鳥が出来上がる時間など、よそ者の私たちに様々なことを教えてくれた。私たちはこの人たちの商店街を盛り上げたい。その一心でグッズ作りを進めていった。そう私たちに思わせた理由は他にもない、商店街の方々の人柄だった。人とのつながり。商店街の本質にようやく気付いたところで、私たちのグループワークは幕を閉じた。

相原瑛里・佐藤龍ノ介・竹下綯



墨東大学をふりかえって



## 著者 bockt による「トークセッション」

2012年3月17日(土)

墨東大学京島校舎



### ● 若者が悶々とするまち？

**加藤** ゆるゆると話しますか、じゃあ。

**岡部** 墨大の活動のラストにあたって、印象に残った墨大生とかを確認してみながら一緒に若者の未来みたいなことを語ってもいいかなと…そんな人います？

**加藤** ま、だから結局このまちがどういう、こうなんかブラックホールの、人を…なんて言うんだろう、人をどう変えてしまうかみたいな。

**岡部** それ興味ありますね。

**木村** このまちに来ると人がどうなるのか。

**加藤** 人がどうなるか。

**岡部** 若者がこうなるみたい。まあナカジと大崎ぐらいが。

**加藤** 大崎くんね。ナカジと大崎君てのは、まあぼくたちが共通的に知っている変化した人たちだから、そこ

から。彼らについて語りながらでもいいです。

**岡部** 若者の未来について考えますか。墨東の持つ自我みたいなものについて。

**加藤** うん。

**岡部** 語りますか…美味いですこれ。(鼎談前に行われた講義「カレー考」の食材を食べながら)

**木村** 味噌、美味いですか？

**岡部** うまいです。パンに味噌つけるの初めてですけど(笑)

**木村** 若者かぁ…

**岡部** 若者ていうかま、大崎？

**加藤** まあ大崎君について語り倒すっていうのもいいですね、この際(笑)。大崎くんがま、なんていうんだろう。実際、ぼくは墨東での大崎君しか知らないわけだから…

**木村** そうですね。僕も大崎さんとじっくり、例えば5分以上とか話したことってないですね。彼の深い部分のことは知らないで、鼎談スタート前の彼のいろんな情報ってというのは新鮮でした。



加藤 ナカジのほうがまだわかるな。

岡部 ナカジね、ナカジ今アレです。公務員の学校に行ってる。

木村 その公務員になろうと思ったことと墨東に1年なり2年なり関わってたことってなんか関係あるんですか？

岡部 公務員になろうって彼は言っていないで、墨田区役所に入りたいて彼は言ったんです。

加藤 ほんとに！？凄いな！

岡部 区単位での試験の枠と、都の中での試験の枠、両方あるらしくて、それを狙っている。

加藤 ヘー、初めて聞いたそれ。

木村 完全にブラックホールに…

加藤 吸い込まれましたね。

一同 笑

岡部 良かったのかどうかってね、彼は大学3年生の時に希望の就職先としてフジテレビって書いてたんですよ、そっちがおもしろくて。

一同 笑

木村 いいなあ。

加藤 フジテレビよりはいいんじゃない、墨田区役所のほうが。じゃあ岡部さんから…その話はおもしろいなあ。岡部さんは何がそうさせたと思います？でもやっぱり明らかに墨東っていうか「まち見世」と「墨大」が影響してますよね。それって、なんなんですかね？

岡部 もともとだってねSFCの受験までした奴が。

加藤 そうでした…なんか劇的な変化ってのは記憶にあるんですか岡部さんの中で、あー変わったなっっていうのは。

岡部 去年の卒業論文の発表の時ですね、まあこういうのまとめるのすっごいキツイと思うんですよ、誰がやっても。ただ、多分一般的な、客観的な学術論文としては有り得ない、自分を自分で分析するっていうスタイルの論文を…論文というか発表をしてもらったんですよ。あっ木村さんご覧になってましたよね？

木村 一番リアリティがあったし、一番男らしく見えましてね。

岡部 男らしく！そうなんですよ、たぶんあの10何組発表した中で、一番評価が高かったんですよ。会場の雰囲気も虜にしたんで他の先生の評価も高くて。

加藤 っーん。

木村 なんか僕の印象だと、ナカジが一番、まあ自分のこ

とをやってるので当然なんですけど、すごい自分事でものすごい切迫感もあるし、リアリティもあるし…もう、すごい赤裸々でしたよね。赤裸々に吐露してましたよね。

一同 笑

木村 だからすごい迫ってくるものがあった、ナカジの発表が一番良かったですよ。で、小手先の何かをやっているという訳でもなくて、もう墨東でどんな青春を過ごしたかっていう…まあぶっちゃけそういう話なんですけど。聞いて楽しい。

岡部 しかも、かなり自虐的に語ってまして。あの、自分がいかにダメ人間だったか、みたいなことを。墨東の会議、まち見世の事務局会議で、そのときのフィールドノートとか「今日も誰にも話しかけられなかった」みたいな。

加藤 ああ、ありましたね。去年の「墨東大学・大学日誌」にも載ってた。

岡部 載ってましたっけ？

加藤 ログとかにも。

岡部 あ！で、事務局会議に行ったらまずtwitter立ち上げて。

木村 iPhone いじって。

一同 笑

岡部 で、それを語れたのが、自分自身の口で、自分自身の言葉で、ああいうみんなが見てる場で語れたのが、ひとつの、なんというかカタルシスというか、今まで溜まっていたものが浄化されていったのでしょうか。

加藤 うーん、なるほどね。

岡部 そこからなんか、その話は墨東でもウケたらしくて。なんか見方がみんな変わってきたのかなあって…ナカジは変わってないと僕は思います。それがナカジの論文の肝だと思ってます。

木村 彼自身が変化してるとは…

岡部 思えないです、僕(笑) なにか、状況が変わっていったというか。ナカジが変えたというか。

木村 ある意味周りの状況を変えるっていうことと、自分が変化するっていうのは、意外と同じかもしれないですね。まあ自分自身の本質が変わらなくても周りが変わることによって成長したと感ずるというようなところあると思うんですけど。

岡部 墨東にとってナカジは何だったんでしょう。

**木村** そうですよね、思えばそうそう人間ってガラッとこう変わるわけもなく。成長するとか変化するって外側の環境を整えるとか変えるっていうほうが大きかったりしますもんね。

**岡部** すっごーい、ちっちゃーい話なんです。卒論で事例で紹介されてるのが。例えば、「アトレウス家の鍵を預かった」とかね。

**一同** 笑

**岡部** いいんですよ、これがほんとに嬉しかったんだなっていうのが。通常、クールな研究者は多分データにしないであろうことがすべてナカジの場合はデータになって。あとはもちろん例の「ナカジって呼んでもらえるようになった」という話であるとか、あとは電車でいつも一緒に帰る人達の隣に座れなかったとか、いつも3人で帰ってって対面にしか座れなかったんでして。

**加藤** あーなるほどね、でもあるよね、そういうの。

**岡部** それがある日、大学院のことを考えるから…だったかな？ そのまま話の流れで3人横に並べて座れたらしいんですよ。そういう…

**加藤** なるほどね。

**木村** で、墨田区で働きたいって。

**岡部** そうです、そのためにわざわざ学校にまで行って、今年一年は去年のそういうナカジフィーバーが起きて、彼「まち見世」の事務局長だったんですよ実は。知ってました？

**加藤** 今年度の？まち見世の？

**木村** えっそれ知らなかった！

**一同** 笑

**木村** そんな肩書き聞いたことない…そうだったんですか…

**岡部** 墨東まち見世 2011 の事務局長なんです。

**加藤** 事務局長って結構偉いんじゃないの？

**木村** 権限がありますよね。

**加藤** 事務局長って履歴書に立派に書けるでしょ。だって東京都のアートポイント計画の…

**岡部** 肝入事業でしょ。

**加藤** 事務局長でしょ？

**岡部** それを誰も知らないっていうね。

**木村** いや、なんか僕が聞いたのは…今年はその誰かが事務局長って決めてやると、その人に責任が集中したりして大変だから、そういうのは決めずに、フラットに運営し

ましようっていう話は聞いてました。

**岡部** 僕も聞きました 笑

**木村** でも実はやってたんだ。

**岡部** なんかに表に出しちゃいけない肩書きだったんじゃないですか、もしかして。

**加藤** いや、言っちゃって良かったんですか、岡部さん。

**岡部** まあ、もう、ね。済んでますし。

**加藤** 「まち見世」は、11月23日に終わってるし。

**岡部** ナカジも公務員目指すんだし。

**加藤** そうなんだ。

**木村** 公務員を目指すというか、このまちにからみたいってことですよ。

**岡部** そうですね、そのときの一番のステップが「僕はアーティストになれないし」っていうのがあって。

**木村** なんかの、就職先を決めるっていうか人生の方向性を定めるのには、すごい正しい道筋の気がしますね。1年2年ここで暮らしてみても、悶々として。

**加藤** まあそうだよ、確信を持って結論を出したってことだよ。

**木村** 最初のフジテレビっていう、そのあんまりにも漠然としたチョイスとはもう雲泥の差ですよ。

**加藤** そうそう。

**岡部** たぶん SFC っていうのもかなり漠然としたチョイスで。

**加藤** うーん。

**木村** SFC 楽しそうでもすもんね。

**岡部** なんかが格好いいとかそういう。当たってるんだけどやっぱそんなに考えてなかったかもしれない。

**木村** なるほど。本当の自分の道を見つけかけてるんですね。そう考えると素晴らしいですね。

**岡部** SFC の大学院入試の時ほとんど勉強に身が入ってなかったのを考えると…

**木村** 今は結構身が入っている。

**岡部** ね。あ、そうだ、模試があるからって飲み会を断ったんだ。

**一同** 笑

**木村** すごい、マジだ。

**加藤** 素晴らしい 笑

**岡部** なんなんですよ？このまちを支えたいんですかね？それともここにいたい！っていう感じなのかな？

**加藤** そういう理由なんだろうね、でもそれが少しでも分かると、それこそ墨東の魅力とか、このまちの秘密ですよね。

**木村** ナカジにとっての学習環境として墨東が良かったからってというのは絶対あると思うんですけど、その学習環境の整い方というのが、ただ下町があって、っていうだけではそうならなかったわけじゃないですか。まち見世みたいなシビアな場があって、そこでなんかやらされたり、泣かされたり。

**岡部** 泣かされたりね！

**木村** で、なおかつ岡部さんとかが捲き上げてくれるじゃないですか「ナカジのその悶々とするの、おもしろいじゃん」みたいに。そういうのを論文にしちゃえばいいじゃんって。そういう周りの大人もいてっていう、そういういろんなピースが集まっているんですね。もしくは本当にまちの力に引き寄せられたからなのかは解らないですが。

**岡部** ナカジのロールモデルはこっち側にいる人なんですよ。話を聞いてると、完全に。多分ナカジが一番好きなのは北村伊知郎さん、アーティストの。

**木村** 「労働コンプレックス」の。

**岡部** 北村さんが大好きらしくって。

**木村** へえー。

**岡部** 働くってなんだろうみたいなことを…

**木村** あっ、北村さんもどっちかという悶々とする系のアーティストで、前回のまち見世とかでも、作品をネットワークパーティーで発表したんですけど、結局その…映像作品がまとまらなくて、悶々とする映像と悩んでる映像が編集されてるんですよ。ひたすら「ム〜」って悩んでる「ハア…」ってため息ついてる。僕はそれ大好きで、でもなんで大好きかって言うと、ナカジの論文発表聞いた時と同じ感想なんです。悶々とすることも価値じゃないですか。

**岡部** 価値ですかね、あーでも個人的には価値かな。

**木村** それを見せ方変えれば価値になると思うんですよ。で、そういうのを見せることができる北村さんっていうのはすごい僕、面白いなあって思ったんですよ。本人は「できませんでした」とか「失敗でした、ホントすみませんでした」とか言ってるんですけど、でもなんかぼくは好きでしたね。

**岡部** 他の菅我さんとかも割とそういうのは好きっていう

か「いんじゃない！」みたいな感じなんですか？

**木村** わっかんないなあ。僕なんかは「もっと悶々とすればいいんじゃないですか」って言いましたけど…もっと。北村さんの作品として成立させたいというのがあったので、反省という意味合いが濃かったらしいんですけど、僕はさらに赤裸々に悶々としてる様子が見たいと思っちゃいましたね。

**岡部** ナカジもかつていい卒論発表がしたかったみたいで。

**加藤** クールに。

**岡部** そうクールに。「今まで馬鹿にしてきた奴らを見返してやる」って言って作ってきたのがほんとに表面的で。変にパワーポイントとか keynote で技巧的に凝ってて、内容がまるで陳腐なものを持ってきてっていう。

**加藤** そうかあ…。

**岡部** それで2週間か1ヶ月くらいで直して。で、もしかしたらナカジの自虐的というか赤裸々な晒し系卒論はやっぱり同級生にはそんなに人気ないってうか。

**加藤** ああ。

**木村** そうなんです。

**岡部** ナカジまたそういう自虐的なネタ言っちゃってみないな。だけどここで発表すると違うんですよ。もっと悶々とすればいいじゃないかっていう人がこっちにいるんでしょうね。それがナカジを惹きつける魅力なのかな？この大人って悶々としてるんですかね？

**木村** どうなんでしょうね…

**岡部** 六本木ヒルズにいるような人たちとは明らかに違うような気がするけど。

一同 笑

**加藤** まあねえ、違いますよね。

**木村** 悶々としてた時期って自分にもものすごいあって、すごい辛いし、なんにも先が見えなかったりするんですけど。今10年前とか思い返したりすると、あんなか時間ってすごい重要だったなあって思えたりしないですか？

**岡部** 僕まだその悟りまでいけてないです。まだ無駄だったなあ思っちゃいますもん、まだまだ若造ですよ、僕。

**木村** いや、なにそんな若ぶって。

一同 笑

**岡部** 悶々としてるとときに誘ってくれる大人がいるって幸せですよ。

**加藤** あと、やっぱり遠慮しないから。

岡部 大人が。

加藤 うん、ここの大人。ここの大人っていうとちょっとあれだけど、そこがいいんじゃないですか、きっと。

木村 それはまちの人たちも含めてっていうことですか？

加藤 うん、「まち見世」自体も。ぼくも全然最初はバックグラウンドを知らずに、「まち見世

っていうのも岡部さんから聞いて「そんなのあるんだー」っていう感じで接触を開始したからあれだけど。こうなんか、さっき岡部さんが来る前に話していたんですけど、やっぱりここはブラックホール。自分と向き合っちゃうっていうか…なんていうか優しいことは優しいんだけど、全員が優しいわけでもなくて、微妙に冷たくされちゃうみたいなのところもあるんじゃないですか。だけどそうすると悔しさとか悲しさとか、なんかよくわからないんだけど自分に向き合っちゃうみたい。それってよくわからないけど、アーティストにとっては逆に居心地がいいっていうか。場合によっては、自分を相手にしてくれなかつたり、平気か否定したりする人がいるっていうこと自体は、多分アーティストにとっては凄く幸せなこと、むしろそこから伸びたり悩んだりそれこそ悶々とするっていうことがこう土壌としてあるのかな…だからナカジも大崎君も悩んじゃうみたい。

木村 まずは悩んじゃう。

加藤 まずは悩んじゃう。違うかな？で、悩んでるとビール持っておっさんが来る。それを味わうと「あ、もうちょっとここに居ようかなー」って。

木村 さっきもうちょっと居ようかなって思いましたよね。

加藤 ね。いやもう4月でここ手放さなくてもいいかなって…なんかね、聞いたらバスが停まるんだってあそこに。

岡部 コミュニティバスみたいなの？

加藤 うん。あそこの肌着屋さんのとこに。やっぱりスカイツリー効果でここまで来て。たぶん、プランとしては、あそこで降りて、みんなここをゾロゾロとね。

岡部 すげー！あつ、で「あっこッペパン屋だー、テレビで見たい」みたいなの。

加藤 だからさ、ここ開いたらちょっとカレーとかいけるんじゃないの？って。カレー屋さんとかどうでしょうみたいな…ちょっと嫌な欲が出ましたね、一瞬。

岡部 そっか一下町の力であるのか。

加藤 だから、なんだろう、非常にこう…意図的ではない

んだけれど、冷たいんだけど「もう嫌！」って思っているぐらいの時に、なんかすごく優しくされるみたいなのさ 笑

岡部 ああ、大崎それ！「もう、嫌です」みたいなときにね、なんかね、また行っちゃう

加藤 だよ、そうなんだよね。

岡部 卒展のときいなかったじゃないですか。

木村 いなかったですね、あのときは墨東に来てたんですか？

岡部 たぶんそうですよ、あのとき墨東でイベントがあって、大崎は卒展で自分の展示してるのに会場に居なくて。

加藤 あーそうなんだ。

岡部 で、そのときのこっこのイベントの名前が「I'm here」っていう。

一同 笑

岡部 ここにいるよって。

加藤 わかりやすい。

木村 谷山恭子さんのプロジェクト。

岡部 そう、そのチラシだけ展示会場にあって。

加藤 ふーん、だからなんかこうあれですよ、隙間にこう…入ってきちゃうんだよね…

岡部 たぶん、あの大崎っぽさってのはやっぱりたぶん…横浜のちょっと都会的なキャンパスではないんじゃないかな…ウケないというか。

加藤 なるほど…フツと気を抜いた時になんかスツッと入り込まれてしまう…そんな感じじゃないですかね。

岡部 そう、フツと繋がりが切れるかなと思った瞬間に別の友だちがこのエリアでできちゃうような感じで…

木村 で、自分がある程度までいい気持ちになって「あ、なんか受け入れてもらえた」みたいな心理状態になってちょっと調子に乗ると、こうガツンとくるようなところはあるんですよ。

一同 笑

## ●「いいね！」の他のもう1つのボタン

加藤 だからまあ、ツンデレみたいな感じですよ。

木村 そう。それ面白いですよ。僕は下町っていうのやっぱり皆さん人情深くてちょっと話しかけたり、墨東文庫の取材とかしててもあれなんですけど、皆さん自然にいろんな話してくれる、みたいに思っちゃってる自分がいるんですよ。それってすごい甘えなんですけれども。まことに

対して甘えちゃって。で、こないだ墨大の授業でやった「〇〇学を探す」でコッペパン屋さんにちょっと行って、そこでナントカ学みたいなものを見つけられないかなと思って行ったんですよ、そしたらホント…冷たくされて…

**岡部** そうですよ、僕も一回トライしたことがあります…

**木村 (亜)** それってでも冷たいっていうか「いらっしい」とか「ありがとう」とかすごい普通で、怒ってもないし良い感じだったよね。

**木村** …でもそれ以上のことがない。自分でめすごくイヤらしいなって思うのが、こっちがこやかに「こんにちは」とか言う時に、既に向こうからのフィードバックを期待している自分ってのがすごいいるんです。で、フィードバックが無くて、こうカクツてするっていうか… その繰り返しみたいのはありますよね確かに。

**岡部** 自問しちゃうんですか？

**木村** そうなんです

**岡部** 「そういうばそれって当たり前だよな」とか。

**木村** 「…俺甘えてた」みたいな反省をしたり…するんですよ。

**加藤** うーん、そっか。それだからまちの…まあおおげさに言えば「まちの能力」というか。

**木村** そうだと思うんですよ。

**加藤** ねえ。文化圏なんですよ、実はね…いやツンデレなまちっていうのは偉いと思いますよ。

**岡部** 徹底してますよね。

**加藤** ね。

**岡部** だって僕らにこやかに返したほうが楽なんですよコミュニケーションの上で。

**木村** ですね。

**加藤** そう。

**木村** 記号的に。

**加藤** そうなんですよ。

**岡部** ニュータウンなんかほんとに挨拶したらこやかに返してくれて。

**加藤** そう。だから最近ほくが思うのは Facebook って「いいね！」しかないじゃないですか。あれがね、なんかちょっとやだなって思い始めてきてて。お互いに褒める環境だから気持ちはいんですけれどね。「いいね！」ってされるのもうれしいし、するの嬉しんだけど、あれってなんか

どうなの？って、ほくは感じていて。ここは違うじゃん。「いいね！」と他にもう一個ボタン持ってる感じじゃない？だからもう1つのボタン持ってるまちっていうのは、実はそちの方が成熟してるっていうか。岡部 今日のモノに流されてないって。

**加藤** うんそういう意味でね。そのほうがなんかリアルなのかもしれないですね。

**木村** やっぱり…ほんと月並みな感じになっちゃいますけれど、例えば区画整理されてないとか、そのことによって昔から脈々と住んでいる人が多くてなおかつその人達がまちを育てるってなると、やっぱり成熟度？人間たちとしての成熟度は増して行くんでしょうね。それがないとやっぱりどうしても「いいね！」っていうポジティブなものだけを徹底してやらざるを得ないみたいな…ま、笑顔だけみたいな。

**加藤** そうそうそう。

**木村** で、それ以外のものが入ってくるとトラブルになっちゃうみたいな。普通の住宅地とかはそうなんじゃないかなって思うんですよ。

**加藤** そうそうそうそう。

**木村** インターネット全般もそう、Facebook もそうなんでしょうけれど。

**岡部** 「補講の歩行」で一緒だった徳山君。

**加藤** はいはい。

**木村** まりもちん。

**岡部** あの子「迷子学入門」の時にわざわざ一人一人に「こんにちは」って言いながら歩いていったんです。スカイツリーの方まで。そしたらおじいちゃんおばあちゃんは目も合わせてくれないって。

**木村** 言っていました言っていました。

**岡部** 迷子になってスカイツリーまで行ってしまって、スカイツリーは他所から来た人が写真とか撮ってて。そのまわりについた瞬間「こんにちは」とやたらみんながフレンドリーに話しかけてくれる空間になって。

**木村** そう、その話面白かったです。

**加藤** おもしろいなー。

**岡部** そういう実験をしながら行ったと言っていました。みんなに無視されたって。

**木村** 下町の切り口として「優しいだけじゃない！」みたいな。

**加藤** やっぱり笑顔だけとか「いいね！」だけっていうのは、やっぱり人を信用していないことの裏返しっていうか。「いいね！」だけの世界にいるっていうことは、つまり「安心した人」っていうフリをしているわけだけど、なんか怖いですよねそれ。

**岡部** ナカジと大崎は「いいね！」を超えた学習環境にうちやっつて。

**加藤** うん、そうだと思う。

**木村** だからまず、やっぱりガクンと落ちるわけですよ。

**岡部** うん、でもだれかが拾ってくれて、誰かが…見えてたんでしょね、今ガクッてなってるのが、て拾ってくれて…じゃあ優等生なんだ彼らはこのまぢの。

**加藤** そうだね。

**岡部** で、ナカジは今度はこのまぢで生きて、自分でそれをやろうしてるのかなあ。「いいね！」だけではない人との接し方を。

**木村** かもしれないですね。

**岡部** 10年後とか20年後とかにやっちゃうのかなナカジ。

**加藤** それ、見たいね。

**木村** 見たいですね、見届けたいですよ。

**岡部** いやまぢの住人になるってよっぽどだと思えますね。「ならうとする」って。

**木村** 確かにそうなんです、僕このまぢ大好きなんですけれども、積極的に住みたいとは思えなくて、別に住みづらいか嫌いというのではなくて。

**岡部** むしろ住みやすい。

**木村** だと思っんです。でもなんか移住するところまではいかない。そこでナカジが踏ん切りつけちゃってるのがすごい。やっぱり自分の場所、見つけたんでしょね。

**岡部** そうだね、他のナカジの同級生の他のゼミ生も大手町まで20分だし、電車で、「住んじやおうかなー」みたいなことをノリで言ってる。あの、渡部拓郎君が。

**加藤・木村** ああー。

**岡部** 彼は墨大で結構優等生だったと思うんですよ、で、しっかりものだし「ここに住もうかなー」とは言ってましたがまあ選びませんでしたね。ネタっていうかまあ候補でしかなかったんでしょね。墨東エリア全体では彼はもしかしたらまだ優等生になれてなかったのかもしれない。ガツンとやられてませんか。

**加藤** やっぱりこの京島校舎で寒い中暮らしてたとか、そういうのあるよね、きっと。あれなんかある種さあサバイバルというか…成功者ですよ、生き延びたという意味。おぼちゃんガバナナくれたとかいう話だとか、いいね！」もディスりもある中で成長したのかなあ。

**木村** そうですね。

**加藤** でもなかなか叱ってくれるまちってないですよ、実際。他に行っても。大体見てすぐ「よそ者

だってことは相手にはわかるわけだから、そうなったときにメンタリティとして敢えてディスらないですよ。よっぽど迷惑なことをしたらわかりやすい形で排他的な行動に出るけど、そうじゃない限りはとりあえずまあ笑顔で「どこから来たのー？」とか言って「ふーん」ていうのが安全というか安全ゾーンじゃないですか、振る舞いとして。それを敢えて選ばないというか。必要なら無視もするし叱っちゃうっていうのがパワーなんじゃないかなあ。だから意外と来ちゃうんじゃないですかアーティストの人もノンアーティストの人も、ナカジも含め。その本質に触れた人は住んじゅうのかなあ。そういう意味からすると、僕はまだそれにほんとは触れてないのかもしれないですね2年近く関わって

**木村** 僕なんか明確に「悪いね！」って言われたことありますよ。

**岡部** えっ 誰、関係者に？

**木村** いや、あの墨大の授業で「ミニマムアーバニズム」をやらせていただいて。で、お隣のきくのやさんの縁台を作ったんですよ。で、段々完成に近づいてきて、一応そのお客さん、きくのやさんの常連のお客さんが使う椅子だったので、飲んでるお客さんに見てもらったんですよ。そしたら、それこそ「いいね！」とか「よく頑張ったな」って言うってくれる人もいましたし、で、皆さんお客さん職人さんが多いので優しくアドバイスしてくれる人もいますよ「このペンキの塗り方はね本当はこうじゃなくってさ、こういう素材を使ってさ、こうして塗るともっとうい風合いが出るんだよ」みたいな話をしてくれる人もいます。で、強烈だったのが、見た瞬間「おまえこれ駄目だ。全部バラしてやり直せ」って言うおじさんがいて（笑）なんかもう勢いで言ってるんですけど、何が駄目なのかも一切言ってくれずに「やり直せおまえ」ってもうすごい拒絶なんです。だからどういう意味なのかなって考えた時に

「お前みたいなのそ者に作ってもらった椅子なんか座らねーぞ」っていうことなのかも思ったし、ただ悪酔いしてただけなのかわかんないですけど…ものすごいこう（笑）パッとみて「駄目だ」って言われました。あれ結構最初ショックで。

**岡部** 言う必要のないことですよ僕ら、一般的に生きてる僕らからしたら。

**木村** そうなんです。

**岡部** なあなあでね、まあ自分はすわないけど、まあ。

**木村** まあ、座んないとしたらなんにも言わないってのが普通なんですけれど。そこを敢えて「駄目だ、やり直せ」って。

**岡部** 座るつもりだったんですかね。

**木村** わかんないです。だからまあ強烈な経験でしたね、2011年の墨大でしたけど。

**岡部** 全てのことを自分のこととして考えてしまうんですかね。

**木村** まあそういうことでもありますよね。あるいは何か理不尽な徒弟制度的なことを示したかったのか…

**加藤** でも「やり直せ」って、拒絶なんだけれども、あの…積極的にかまっているんですよね。

**木村** そうだと思います。

**加藤** その気がなければ無視すればいいだけじゃないですか。「ふーん」ってそこで遮断すればいいんだけど「やり直せ」っていったら、やり直して帰ってくるかもしれないわけだし「やり直せとはなんだ！」って返ってくるかもしれないし。

**木村** 「なんですか！」みたいな感じになるかもしれない

**加藤** そうそう、やっぱ敢えてそう言ってるってことはむしろ積極的に来てるってことですよ。

**木村** そうですよ、そこは面白いですね。

**岡部** 例えば修論の指導とか、卒論の指導とかで「やり直せ」って言っちゃった場合に僕ら責任発生しますよね。

**加藤** うん。

**岡部** 今度いいよと認めてあげる責任といいますが、次持ってきたものを再評価する責任。

**加藤** そうですそうです。

**岡部** だからその責任、まあ酔っ払ってたからわからないかもしれないけど。

**加藤** だからコミットする宣言ですよ。コミットする意志があると。

**岡部** そうなんです、だから卒論もダメ出しするってことは仕事増やしてる。

**加藤** だからある種、仕事を抱える覚悟っていうか。言ってる時はそんなことまで考えていないかもしれないけれど、結果としては…

**岡部** そうです時間取られてます。だからナカジを泣かせるっていうのも同じですよ。

泣かせるってことはその後受容するっていうか。

**一同** 笑

**岡部** その覚悟が。

**木村** 泣かせた以上は（笑）

**岡部** じゃなきゃ面倒臭くて泣かせないですよ。

**木村** そうだと思いますよ。

**加藤** そうなんだよな、不思議だな。

**岡部**すごいなそう考えると。

**加藤** だからそれはやっぱりカルチャーなんですかね。

**木村** このまえ妻と話していて、彼女が言ってたんですけど、やっぱりまち…あるいは人とコミュニケーションを取ることってそもそも面倒くさいことで、で、まちづくりなんかは本気で人間同士がわかりあえて理想的なまちを作るって考えたら、めちゃめちゃ面倒くさい作業だと思うんですよ。

**加藤** うん。

**木村** で、その面倒臭さを回避するために、例えば都市計画とかでパツンとでっかく再開しちゃうみたいな、結局面倒臭さの回避がスタンダードになりつつあるよねって話になって、ああそうだよなと納得したんですけども。なんかその「やり直せ」って言った人だとかナカジを泣かせた人たちに面倒臭さに対する覚悟みたいなのがあるんですかね。面倒臭くてもいいよって、面倒な事になってもいいよって思ってるって思いたいですね。

**岡部** …生きてるぜ。

**木村** そうそう「生きてるぜ」感ですよ、すごく。

**加藤** そうねえ。

**木村** 生きるって面倒臭いですからね …まあナカジがそういう面倒臭世界と、一方でこれまで住んでた、その面倒臭さが隠された、排除された世界との差に気付いて、意識的でないにせよ、感覚的にも気づいたから「じゃあ、もうここに決めよう」みたいなのがあったとしたら素敵ですね。大変でしょうけど。



加藤 でも楽しみだよな。

岡部 ナカジの方も生きる覚悟は必要。

木村 そうですよな、覚悟は必要ですよな。

岡部 「生きていくのはこんなに面倒なのか！」と少なくとも思ったわけですよな。

木村 泣かされるし。

岡部 雨の中ね、駅で誰も来るかどうかもわからないまち見世散歩のお客さんに、もし来たら「今日キャンセルになりました」というのを伝えるためだけに待ってたり。

一同 笑

木村 そんな辛い役目を…

岡部 3時間くらい。駅で寒い中。11月結構寒いですからね。

加藤 それは辛い仕事だね。でそれはどうなったんですか、結果は。誰か来ちゃった？

岡部 誰も来なかったです。

加藤 それは良かったかな…来ちゃってたらまたやだよな。

岡部 ですよな3時間、初対面の人に。

木村 「なんて怒られるかな…」とか。

岡部 gmailとかは出してるんだけど返信がない人のために念のため駅にいて。

木村 そういう面倒臭かったり理不尽だったりする経験はもう物凄いですっていうことですね。

岡部 メチャメチャしてます。ネットワークパーティーでしたっけ11月23日の。あのときみんな曽我さんの所でパーティーしましたよな。

木村 はい。

岡部 あのときナカジは一人で…あの、墨田区役所で1個展示物があったんですよ。

木村 はいはい。

岡部 あれを一人で回収に行っていて、一人でその様子をtwitterに上げてて。

加藤 可愛い(笑)

岡部 タイムラインからそのパーティーのタイムラインがあがってくる一方でナカジが一人で「回収中～」みたいな。

加藤 うわー、可愛いな(笑)

木村 いやー僕、ネットワークパーティーで、木村吉見さんと一緒に浮かれて「ダブル木村だねー」みたいに酔っ払いながら司会をやらせて頂いて、すごい面白おかしいをパーティーで過ごして、その帰り歩いてたらナカジとすれ違っ

たんですよ。

一同 笑

木村 ナカジ何でパーティーにいかなかったんだろうって思ったら…そんなことがあったんですね。

岡部 回収してたんです。

木村 それこそ僕反省しないと、浮かれて…

木村(亜) でもそんな目に遭っても墨田区に帰ってくるって凄いですよね。

加藤 すごいよねー。

木村(亜) だって絶対舌打ちしてたよ心の中で。酔っ払ったおじさん見て。

加藤 「俺回収してのために」

木村 「あいつーなんか楽しそうだなー」みたいな。

一同 笑

木村 「あ、ナカジ、どうしたの？」じゃねーよとか。

岡部 よくすれ違いましたね。

木村 すれ違いましたよ。はい。思い出しました今。

加藤 なるほどねー。

## ● 「また来ちゃうのかな、このまちに」

加藤 なんかじゃあまとめますか？

岡部 はいお願いします。

加藤 どうやってまとめたいいんだろ？これ記事になるのかな。ま、でも墨東の懐とかそんな話は出ましたよね。どうやって終わればいいんだろ？来年の…ナカジの1年後はどうなってるんですかね。

岡部 ね。あーいうとこって採用とかいつからやるのかわからないし。何して…だから墨東まち見世2012をナカジが。

加藤 2012はあるんですか、日程もう決まってるんですか？

岡部 決まってるじゃないと思います。

加藤 あ、そうか年度変わってから。どうしようか来年のナカジにメッセージを送って終わるとかは…ちょっとやですよ(笑)。どうやって終わればいいかな。ま、これ自体は今年度の締めって感じじゃないですか。

岡部 そうですね、結構大規模なことやったくせに僕ら今すごく細かい話しかけてませんよね。

加藤 そうですよな、非常に細かいですね。



**岡部** それがよくたななって思っ。通常だつたらたぶん「こういう発想とかが色んな県とかであつたらいいですよな」みたいな話を3人でやるのが想像されるのに。

**木村** 個人の話(笑)

**加藤** 個人の話。

**一同** 笑

**岡部** そういことなのかなまち。なんかこの墨大が青山とかにもあつていいですよとか全然思わない。

**加藤** ないですよ。だから似たような試みが、まあそれこそ三宅島とかあるけれども、当たり前ですけど、これは、ここでしかできないですよ。このノリの世界はここでしかできない、きっと。同じ黒板壁を作つたとしても、できない感じがしますよね。

**岡部** これをうちの大学の側とか青山とかでやつたら…こんなに無視されないと思うんですよ。

**一同** 笑

**木村** なるほど。

**岡部** 来ちゃうと思うんですよ。地域活動を活発にされている人とかあのへんのネットワークが。これやつたらいいじゃないですか、あれやつたらいいじゃないですかってみんなが。それこそ木村さんがカレー作る必要ないぐらいに誰かがここでなにかやっちゃうと思うんですよ。明確に強い無視を経験したつていうのはこのまちの…面白いとこというか。

**一同** 笑

**加藤** 愛ですよ、愛。だってね、それで最後にあんなふうビール持って来られたら。やっぱり、もう半年借りちゃう?みたいな。

**木村** ねえ。

**加藤** ちよつとなるよね。

**木村** なりますよねえ。

**加藤** 「バス来るんだよ」つてそれとなく言われたらさ、「そしたらもっと暖かくなってから通る人が増えたら俺達楽しいよね」つて。最後の最後にね、ポロッと言われちゃうと。

**木村** すごく象徴的でしたよね、さっきのビールとバスの話。

**加藤** ポロッと言うんだよ。だからそれがやっぱり他のまちとかで試すことは出来るけれど、でも難しい感じがしますよね。感触として。こんなふうにはならない、たぶん。

**一同** 笑

**加藤** いや悪い意味じゃなくて、良い意味でもこんな展開はなかなかないんじゃないかな。不思議なゾーンだよな…

**木村** たぶん想像するところ、日本全国に星の数ほどまちつてあるじゃないですか。墨東エリアだけでもいくつ商店街があつたりするんですけど、昔の街つてみんなこんな感じだったのかなつていう思いはあるんです。

**加藤** うん。

**木村** 面倒臭くて一筋縄ではいかなくて、でも優しくつて、無視されてみたくない、色々ない混ぜになつてるまちみたいなのが。それつてやっぱりナカジがいいなつて思つて移住しちやいたいなつて思うくらい人間のなんですかね。”人間まち”みたいな…言葉はわかんないですけど。人間のためのみちと言うか。で、そういうまちはたくさん点在してたはずなんですけれど、やっぱり唯一残つてる、ここは。そういう感じなのかなとも思うし。

**加藤** そうですよ「みんなあのまちのひとは優しくつて」つていうのはむしろ嘘つて言うかね。

**木村** そうですね。

**加藤** だからそう考える人が減つてる可能性はあるわけですよ。柴又なんて逆だもんね。あそこは何度か出かけてみたけれど、まあ観光地つてもあるけど良い人なんですよね、みんな。それでみんなこう自分たちでももつて持っていた下町、人情イメージとばかり重なるように向こうも来てくれるから、「やっぱ下町つてなんかいいよね」つて。それはハッピーなんです。それはハッピーで帰るんだけど。でもこういう場所を見ると、あれが、嘘とは言わないけれど、なんかちよつと、それこそ密度が足りないつていうか、最後に何か足りない感じがしてくるんですよ。

**木村** リアルな感じですね。

**岡部** 何も考えてないつちや何も考えてない。

**一同** 笑

**木村** 考えてないからこそ、まち自体の人格みたいなものが赤裸々に裏側までも見えちゃう感じはありますよね。

**加藤** そうだね。

**木村** でもなんか僕、墨大やつて良かったなつて今思うんですけど、そういうところですかね…面倒臭いことも優しいことも。

**加藤** 全部ね。

**木村** 全部同居している。それがまちの姿なのかもしれな

という。単純にいい話もあるんですよ。コミュニティの結束力が強くてみたいなのは例えばお風呂屋さんで椅子を作った時にも感じて。お風呂屋さんのご主人がお客さんの住所全部把握して、もしおじいさんのお客さんが倒れちゃったときは家まで送っていけるとか。あの人は一人暮らしで…とか家族構成も全部把握してるみたいな話を曳舟さんのご主人がしてくださって。

それはその、いい部分というか。いい部分…言い方難しいですね。

**岡部** まあ今までよく着目されてきた部分というか。

**木村** そうですね。それを再確認できたいなシーンは講座をやってる過程でたくさんあって。やっぱりそうなんだと再確認できて。そういうところはあったんですけど。それ以外ですかね。「いいね！」だけじゃないぜみたいなの。

**岡部** 下町を語ろうとするとやっぱり僕らそういう記述しやすい部分にまずは惹かれちゃってそれでプレゼンテーションしちゃう傾向ありますよね。

**木村** あります。

**岡部** そういう意味では北村さんが出せなかった、できなかったっていうのはリアルですよ、見つけちゃったんじゃないですか北村さん、見抜いちゃったというか、このまちの、実は考えてないとかまとまってないとか。

**木村** 考えないってのもやっぱり重要なんですかね…考えれば考えるほどスマートになっていくわけですし、効率的になっていくわけですし…

**岡部** あの、僕、山崎亮さん大好きなんですけど、「情熱大陸」にでてくる家島のオバちゃんたちがすげー語りが上手になって。

**木村** あ！どんどん。スキルが上がってるんですね。

**加藤** そうそう。

**岡部** インタビューにめっちゃめっちゃ「あーいう若い大学生が来てくれてね」とか、あっ、これ絶対慶応の学生のこと言ってるなって、なんかそれはどーなんだろうって。

**加藤** そうそうそう、わかんないですよ。

**岡部** 一見いいこと、一見じゃなくて100%いいことなんですよ。

**木村** まあ100%いいことですよ。

**加藤** 100%いいことなんだけれど。

**岡部** これを見ちゃうと、あのテレビ慣れしちゃう海苔を詰めてるオバちゃんたちが「あの子たちが来てくれたか

らね、自分達の仕事に誇りを持ってね！」みたいな本に載ってそうなことを…木村 でもそうですよね、ほくもアーティストとしての役割ってやっぱりよそ者として色んなまちに出かけて行って、そこのいいものを見つけて、しかも住民の人が気づいてない、忘れてるいい所を見つけてアウトプットして、その結果住民の人達がプライドを持つとか。今おっしゃってた話ですけどまさに、その人たちがいいって言うてくれたから誇りに思う、そうなければいなくなってずっと考えてきたんですけども、今新しい課題として、まちを見るときに課題としてどれだけ、その先のリアルな部分を引き出せるか、あるいは引き出すものでもないのかもしれないけれど、僕らが感じるだけでもいいのかもしれないけれど。あとはこの面倒臭さ、墨東で感じた人間関係の面倒臭さみたいなのをもうちょっと考えていくとね。

**加藤** いやーそうだと思いますね。プライドを高めることに貢献するみたいなのは考えたほうがいいんだけど、逆にそれがもししたらプライドを捨てさせている可能性もあって。

**木村** ありますよね。

**加藤** つまりそのテレビ慣れしちゃうなんていうのはある意味負けっていうか何かを捨てているわけですよ。もちろんそれで観光客がいっぱい来てお金が儲かって、みたいな話は、それはそれでたぶん必要とされていたことかもしれないけど、なんか…

**木村** 試みとして成功は成功なんです…けど。

**加藤** 何かを失ってますよね、きっと…。難しいよね。

**木村** でも多分まだ誰も考えてない。

**加藤** 考えてないと思いますよ、その先だよ。

**木村** そうです。

**加藤** だからやっぱり、ほくは岡部さんのさっきの観察は鋭いなと思って。若い人が擦れちゃうっていうか、マスコミ擦れしちゃうっていうような話は。見る人が見たら逆にスーッと引いちゃいますよね。「えっ何あの人…違うじゃんみたいなの」みたいになってしまったら、逆効果みたいなことが出てきちゃうよね、きっとね。

**木村** この不思議な捻れが。

**加藤** 難しいね、それはね。

**木村** そんな感じで…どうしましょう。

**加藤** まとめますか。

**岡部** 褒めてんだか貶してんだかわからない、このまちを。

加藤 いいんじゃないの、それで。

岡部 リスペクトしつつ、僕はちょっと怖いになってるのがこのまちへの印象です。

加藤 まあそうですね。

岡部 覚悟が無かったなっていうことを、どっかでわかってたけどまた気づきました今日…大崎とナカジの覚悟には敬服します。

加藤 そうですね、だからこれらもどれだけまちに溶け込めたかというと全然できなかったって…まあ結論らしきことを言うとするばね。地域に根ざして何とかがって言っておきながら全然巻き込みきれてない…って感じですよ。

岡部 うん、ですね。

木村 でも別の課題が見えてきてしまったっていうことと言うと、「ああ…まちはキャンパス」だったのかなって、教えてもらえたのかなと。当初教えてもらおうとしていたことそのものではないんですけど、もっとその先の深いものまで提示してもらっちゃった気はして、そう考えるとすっごい今の気分としては有意義ですね。

加藤 そうそう、最初想定していたように、まちのおじいちゃんとかいるんな人が先生になってっていうある種の理想モデルというか、それ自体はそんなに間違っていないと思うし、そういうのあればいいなと思うけれど、そんなに簡単にできるものでもないということと。特にここではなおさら難しいというみたいなこともあるし、さっきのテレビ擦れの話からいうとあんまりそうなっちゃってもいけなかったんですよ、きっと。地域のおじいちゃんたちが、みんな「墨大の先生で一す」みたいになっちゃうと駄目だったんですよ、きっと。

岡部 なるほど。

加藤 だからこう適度に冷たくされながら、ほくらがサブイブするっていうのが、多分。まあ結果そうだったというのものもあるけど、それがバランスだった気もするんですよ。そんな感じなのかな。もしかしたら気持ち悪かったかもしれないですよ、そこの誰々さんが「じゃあ講座やるよーっ！」ってノリノリになっちゃって。ここで毎週毎週講座開いていたら、逆にほくらは「えっ」ってなっていたかもしれないよね。

岡部 そっかー 若い学生がね、毎日藤井さん（※13）の授業だーって来て。

木村 カリスマみたいだ（笑）

岡部 薬局のカリスマ教師みたいな、学生が薬局の店番とかやって、「すごく勉強になりましたー！」って。

加藤 ね。

岡部 気持ち悪いかもしりません。

加藤 どうなんだろう、ま、そうならたらなっていたで。

岡部 報告書は書きやすいですね。

木村 まっ、100%いいことではあるんですけどね。

加藤 そう、そうならたらなっていたで。

木村 全然有りで。

加藤 成功っていうかね「すごい！」ってなるけど。

岡部 「やっば墨大すごいよねー」って、学会発表しやすい。

木村 それこそさっきのナカジの悶々とか、大崎君が悶々としちゃって、誰かが悶々としたって話をしてたんですけど、結局その、最終的に僕らも悶々として…

一同 笑

木村 学会とかでは発表しづらい…こう、学会で悶々としている様子ですよ発表するときに。

岡部 そうですねそんな感じでした、前発表したときは。

木村 加藤さんがずっと前にキャンプの時に言っていた言葉で、まちづくりみたいなことを簡単に言ったいかないみたいなの、簡単にそんなこと言っちゃいかんという話をしていて、それを今思い出して。まちとか、人もそうだと思うんですけど、一筋縄にはいかなくて、本当に割り切れないですよ。いいこととして成功すればいい風にしていけますけれど、僕も今悶々としています。

岡部 …また来ちゃうのかな。

木村 ヤバイ！これでなんだかナカジ達が…

岡部 偉くなって。

加藤 ここをまた借りてくれたりして。

木村 「岡部さんもブラックホールに飲み込まれたね」みたいな話を（笑）

岡部 「やっど気づいた？」みたいな。

一同 笑





おわりに

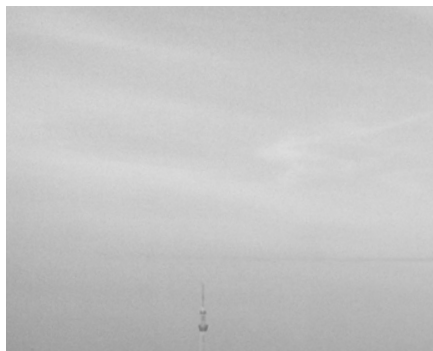
2年目の墨東大学は、教授である bockt のみんなが1年目よりも「好き勝手にやっている」印象を受けた。そして、好き勝手にやっているにもかかわらず、なんとか「全体として成立」していた。思い返すと、これは非常に心地よい組織だったように思う。ミツバチの巣づくりみたいに、計画があるようで、ない。だけど、全体として組織的に動いて見える。そんな組織(?)に墨東大学がなれたようにも思う。一般的な大学講義においても、(平日に墨東大学の取り組みができることがまさにそうであるように)ある程度好き勝手に講義や研究をさせてもらっているのだが、カリキュラムや単位取得も「どうでもよくなった」墨東大学は、輪をかけて通常の大学とは大きく異なるものになった。やりたい時に、ウェブに情報を流し、やりたい講義をやり、帰りにその講義録であるブログを書く。それでOK。何とも言えない爽やかさすらある。強調したいことは、bockt が好き勝手にやっているにもかかわらず、墨東大学自体がなんとなく全体として成り立っていた点である。ただし、強力なトップの学長や学部長の存在があったというのとは、少し違う。1年目は、私ですら墨東大学の授業の多くについて、その概要を説明することができたように思う。他の授業とのバランスや頻度を意識していたし、内容の重複などにもある程度配慮していた。一方で2年目は、全ての講義を掌握できていた人はいないと思われる。でも、少なくとも bockt と bockt に近い墨大生はまとまっていた。全体としての墨東大学は、きちんと成立していた。こんなにも曖昧模糊とした組織なのに、

ある程度のまとまりを感じられたこと。このことが、このうえなく心地よい2年目を過ごせた大きな要因だと振り返る。2年目、bocktの3人が会ったのって、3回くらいじゃなからうか…。ではなぜ「まとまり」を感じることもできたのか。それは、京島校舎やその近隣のまちなかという講義の場所と、加藤先生が管理してくれていた墨東大学のウェブとブログ、それに墨大生や墨東のまちのひとといった人的な資源を、無意識のうちに共有していたからだろう。「今日は墨東大学の講義で来た」と言えば話を通じる人やお店が増え、講義の学生が重なれば、そこで他の授業の話も聞ける。メンバーが肩肘はらなくとも、そこにあるもの。そういった意味では、墨東大学という組織は、墨東のまちなかにあっても不思議じゃないものになったのかもしれない。一生懸命に「墨東大学ってね…」とまちの人に喧伝していた1年目に比べて、はるかに気を張らずにすんだ。良いのかどうかは分からないが、講義がうまくいったかどうかについても、あまり考えなくなった。リフレクションをしないということとは違う。かなりおおらかな気持ちで講義ができる、設立当初の大学理念をやっと体现できたのかもしれない。新しい組織のあり方として、実験的に特殊な方向性を試みていたのが1年目の墨東大学。この時、少なくとも私は新しい関係性の構築のために気張っていた。でも、新しい関係のあり方というものは、この2年目の墨東大学にみられたような、「みんなが楽しく好き勝手にやってるけど、まとまっているように見える」ものなのかもしれない。こんなふうな組織って、

「まち」それ自体に近いのかもしれない。何かやりたくなった時にそれができて、反応をもらう時もある。特に何の関心も示されない時もある。だからといってこちらも、気負う必要もない。子どもがまちの公園で遊ぶのとほとんど変わらない。bocktの3人はそれぞれ、時々、何かに突き動かされたように講義がしたくなり、墨東に向かう。時に学生を引き連れて。時にひとりで。がちがちにプランニングされた大学にはない動き方と動機、これが墨東大学の特殊性だろう。非常に面白い組織だった。大学にしても、企業にしても、トップダウンな組織は敬遠されがちで、ボトムアップであることが歓迎される。墨東大学は、もともとから思想としてボトムアップだったと思う。もしかしたら、ボトムアップであるべき！という思想の呪縛にはまっていたかもしれない。その形態が年月とともに少し成熟たようにみえる。墨東大学というコラボラティブな活動が「楽しい」か、または「面白い」かどうかさらに重要になってきたように思う。面白いから墨東に行く、楽しそうだから講義を企画する。学生がこなくても、実はあまり気にならなくなった。墨東のまちの中で、好き勝手に実践させてもらっているところ的快乐になった。

かなり、欲望に忠実なままに、まちで講義をしてきた。何に縛られるわけでもなく、誰かによく見られようとするわけでもなく。

もしかしたら、まちで何か実践しようとするとしたら、これでいいのかもしれない。





思えば墨東大学のスタートは2010年の6月渋谷のとあるカフェで、でした。加藤文俊さんと岡部大介さんと僕の三人で「墨田区でなにかやろう」ということになり、まず最初のミーティングだったはずです。加藤さんがおもむろに「ちょっと、面白いこと考えちゃったんだけど……」と言いながら「まち自体をキャンパスとした大学をつくる」というコンセプトを説明してくださったのを今でも覚えています。キャンパスや校舎など物理的要素を廃した大学。もともと、より空気に近いものがまちなかに入り込み、そこで何らかの効力を発揮するというビジョンを持ちながらパブリックアートのプロジェクトを行っていた自分にとって、この「空気のような大学」はひどく魅力的なものに映り、嬉々としてこのコンセプトに乗っかりながらその後の約2年間「墨東大学」の活動を続けることになりました。

「墨東大学」という学校はキャンパスを持たないだけでなく、誰もが先生になれるし、誰もが学生になれる。そして時に先生さえも学生になれる（授業中であっても）という特徴を持っています。さまざまな括りをなくす事で「教える」「教わる」という関係性もどんどん変化し毎回の講座は不思議な充実感に包まれた時間になりました。そしてこの僕達のあいだで生じた関係性の変化を大きく包み込んでくれていたのは墨東という「まち」自体の存在だったのかなと思えてきます。もともとはまちに対して何らかの寄与をしたい、という地域活性的なスタンスで講座を組んでいたわけですが、むしろ「まち」が

持つ包容力の中で僕たちは多くのことを学ばせてもらっていた、と今になって強く感じています。この本に収録するために行った鼎談では「ツンデレなまち」「いいね！ だけではないまち」という話題で話が盛り上がりました。どちらのキーワードも最初は「墨東＝下町＝優しく人情深い」というステレオタイプのイメージを持って墨東で活動を開始した僕たちが、実際まちなかで活動する過程で得た墨東というまちの印象です。基本的にまちの人達は優しいのですが、それだけではなく時に厳しいし、時に冷たいし。たまに面倒なこともあるし……こうしてみると、墨東のまちは人間がそもそも持っているような多面性を持ち続けていて、僕たちはその多面性に講座を通して接し続けてきたことになりました。まちが持つ人格のようなものに常に触れていられたことが、墨東大学での最大の学びだったのかもしれませんが。

2010年の夏に渋谷のカフェで産声を上げた墨東大学は2012年の4月でひとまず活動を終えます。でも、墨東のまちがこの多面性を保持し続ける限り、このまちは学び舎であり先生であり続けるのではないのでしょうか。誰かが「ちょっと学びたいな」と思いさえすればきっと。

最後に、この素晴らしい時間を共有させてくださった「Bockt」のお二人、加藤文俊さんと岡部大介さん、それから墨東大学のたくさんの講座に参加してくださった皆さん、そして僕達の活動を包み込んで



くださっていた墨東のまちの皆さんに感謝の意をこめて。僕はなんだか運営の立場にいながらすっかり「墨東大学」の学生になってしまっていたようです。素敵過ぎる学びの時間を本当にありがとうございました。



bocktのメンバーには、あらためて「ありがとう」と「ごめんなさい」を言いたい。というのも、2011年の3月に「墨東大学」がひと区切りしたあと、三宅島でのプロジェクトがはじまって、三宅島のほうにすいぶんエネルギーを使ってしまったから。いきなりグループから離れて、アメリカに行っちゃう某アイドル級の無責任な感じがにじみ出ているわけで、とくに6月以降は、ユニット追放(解散?)の危機に怯え、「裏切り者」と呼ばれるのではないかとびくびくしながら過ごしていた。じゅうぶんな時間をつくれなかったのは確かで、それでも、いささか言い訳めいたことをつぶやくと、どこにいても、「墨東大学」のことを考えていた。本当に。

三宅島に行くときには、できるだけ墨大のTシャツを着たし、夏に開かれた「島市」でもBのロゴ入りの(しかも2010とプリントした1年前の)Tシャツを売った(実際、1枚売れた)。最近リニューアルされた大学のウェブに載せるのも、Bの入ったイスに座っている写真をえらんだ。いろいろなところに、Bのステッカーを貼っている。いや、つまり、そういう表面的なことではなくて、「墨東大学」は、いわば「原点」だということだ。昨年度の活動があったから、あたらしいことをはじめるときには、かならず「お手本」になった。『墨東大学の挑戦』という200ページの冊子と、その成果にいたるまでの過程で感じたこと、考えたこと、話したことなどなど。すべて、「墨東大学」での経験が役に立っている。昨年9月、正式に「三宅島大学」が開校した

が、その仕組みづくりに際しては、「墨東大学」をモデルにしながら考えた。だから「ありがとう」と「ごめんなさい」なのだ。

ところで、今年度の活動で一番印象に残っているのは、5月10日、京島校舎の壁に描いた地図を反転させたときだ。4月30日、5月4日の2日間にわたって「壁に地図する」という講座で、白い壁にグレーのテープを貼って、京島3丁目近辺の地図を描いた。でも、壁の凹凸が目立ち、テープの粘着力が弱いこともあって、どうにかして定着させようということになり、クリアラッカーにするか、それとも…といういろいろ考えて、ぼくたちの出した結論は「地図黒板」だった。つまり、貼ったテープの上から黒板ペンキを塗り、テープを剥がすと、綺麗な「地図黒板」のできあがり!…というわけで、ゴールデンウィークにテープを貼ってくれたみなさんには内緒で、木村さんと黒板ペンキを塗ることにした。壁に定着しているはずのテープが、マスキングテープになってしまうのだ。

あの日は、本当に楽しかった。みんなに黙って、密かに決行したことはもちろんだが、「壁に貼ったテープを剥がしてしまえば、もう、剥がれることはない」という、一休さんや『あたまをつかった小さなおばあさん』(←amazonで検索!)的な発想が生まれた瞬間が、とても愉快だった。小さなおばあさんは、「つかわないのなら、あたまなんかもってたつて、なんのやくにたつね?」と、いつも言うのだ。

「地図黒板」を思いついた数日後には、ペンキを買って、出かけて行った。そういうときには、ペンキ代はしようなどと考えるようなことはない。自腹で、全然かまわない。みんなから大ブーイングがあったら、また白く塗って、テープを貼り直せばいい。そのくらいの心持ちで、のびのびと過ごせるのが「墨東大学」なのだ。

もういっぽうの黒板壁は、(黒板だからあたりまえだけど)講義のたびに消したり書いたりがくり返されるのに、木村さんが描いたあの「B」だけは、ずっと消されることがなかった。あの「B」は、この1年半にわたる「墨東大学」プロジェクトの、永遠の象徴なのだと思う。自由でのびのび。人を想い、人を束ねる。いまは、ただただ、あの黒板の「B」を消すのが怖い。やはり、「墨東大学」の校歌をつくっておくべきだった。灼熱の三宅島にいても、極寒のヘルシンキにいても、どこにいても、口ずさめば、あの「B」が頭に浮かんでくるような、ご機嫌な歌をつくっておけばよかった。



## 墨東大学の挑戦Ⅱ

編集後記            入稿日の朝に大量に原稿が送られてくるのは心臓に悪かったです。こんな大人になりたくないなぁと思いつつも、たぶんメ切りギリギリまで粘ってそうだなぁと思います。（制作担当：小林）

発行日              平成24（2012）年3月30日

編・著              bockt  
                        加藤 文俊（慶應義塾大学）  
                        岡部 大介（東京都市大学）  
                        木村 健世（アーティスト）

発行                  墨東大学出版会  
                        小林 信明  
                        佐々木 慎平  
                        中島 和成

印刷・製本          株式会社 シュービ印刷

この冊子は、平成23年度慶應義塾学事振興資金による研究補助（特B：「地域資産」の可視化を支援するコミュニケーション・デザインに関する研究）によって印刷・製本しました。

墨東大学（事務局）

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322

慶應義塾大学 環境情報学部 加藤文俊研究室内

E-mail info@bokudai.net

Website <http://bokudai.net/>

© 2012 bockt + BUP Printed in Japan.







